

第4-22図 07-SK001実測図 (1/40)

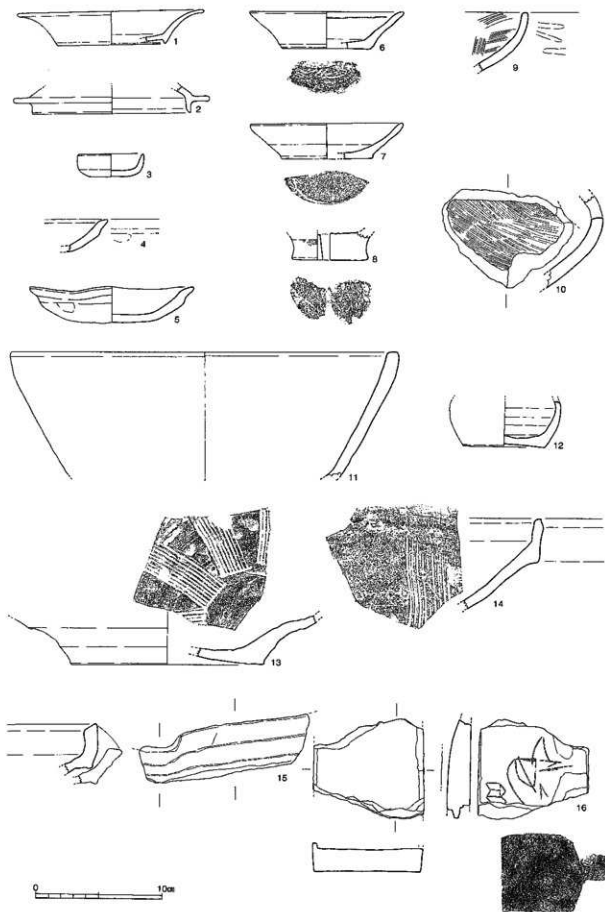
2 土坑

07-SK001 (第4-22図)

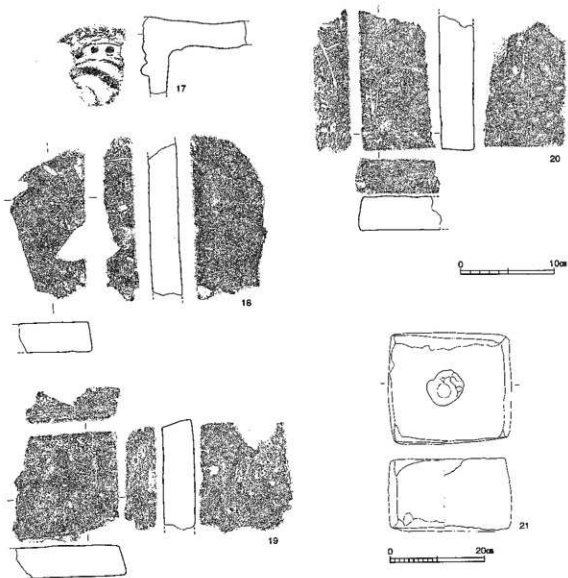
L66区に位置する土坑で、遺構の規模は東西3.5m、南北2.75m、深さ70cmである。遺構の延長部は調査区外に延びる。検出当初は1基の大型土坑と考えていたが、掘り下げ時における礫の散布状況や完掘時の形態から、大小3基程度の土坑が重複していることが判明した。埴土中に礫が多量に廃棄されており、礫の中には石塔の部材（石塔地輪）なども複数認められた。16世紀後半以降に万寿寺旧境内の領域に展開する町屋裏手の廃棄土坑のひとつと考えられる。出土遺物は16世紀後半から末のものが大半を占めるが、一部15世紀代のものが混入している。遺構の時期はVI期（16世紀後半）に比定される。

礫や石塔類
の廃棄

第4章 旧万寿寺跡第7次調査



第4-23图 07-SK001出土遺物実測図①(1/3)



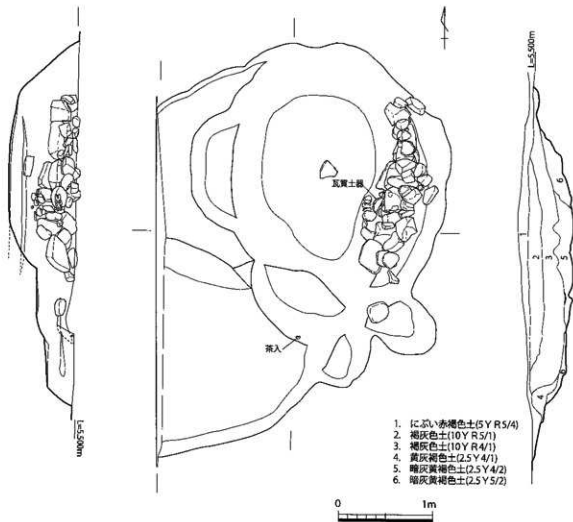
第4-24図 07-SK001出土遺物実測図②(1/4、1/8)

07-SK001出土遺物(第4-23図・第4-24図)

1は中国産の白磁皿で、口縁部が大きく外反する形態をなす。2は中国産の焼締陶器蓋である。3は土師質土器小皿、4・5は京都系土師器皿で、京都系土師器は器壁が厚く、時代的に新しい傾向をもつものである。6・7は在地系の土師質土器皿で、底部に回転糸切り痕が認められる。8は土師質土器燗台で、脚台部が短い特徴をもつ。6～8は15世紀後半に比定される。9～11は瓦質土器で、9は鉢、10は風炉、11は大型の鉢である。10の胴部には、透かし孔が認められる。12～15は備前焼で、12は小型壺、13～15は播鉢である。備前焼の小壺は16世紀後半、播鉢はいずれも中世6期(16世紀前半)に比定される製品である。16は輝緑凝灰岩(赤間石)製の石硯で、表面に意図的な刻線文様が認められるが、何を描こうとしているのかは判然としない。17～19は瓦類で、17は軒丸瓦、18～20は塼である。21は五輪塔の地輪で、上面に水輪を固定するための円形の凹みが設けられている。地輪は他にも破片を含めて数個体が出土したが、最も残存状態がよい1個体のみを図示した。

表面に文様
のある硯

1. 灰褐色土(7.5Y R4/2)
2. 黒褐色土(7.5Y R3/2)
3. 黒褐色土(7.5Y R3/1)
4. 黒褐色土(10Y R3/2)
5. にふい黄褐色土(10Y R6/4)



1. にふい赤褐色土(5Y R5/4)
2. 褐灰色土(10Y R5/1)
3. 褐灰色土(10Y R4/1)
4. 黄灰褐色土(2.5Y 4/1)
5. 暗灰黄褐色土(2.5Y 4/2)
6. 暗灰黄褐色土(2.5Y 5/2)

第4-25図 07-SK002実測図 (1/40)

07-SK002 (第4-25図)

L65区に位置する土坑で、遺構の規模は東西3.0m、南北4.8m、深さ75cmである。遺構の延長部は調査区外に延びる。検出当初は1基の大型土坑と考えていたが、完掘時の形態から、2基以上の土坑が重畳していることが判明した。最も北側に位置する土坑の東縁部に石積みがある。石積みは凝灰岩や川原石を2～3段乱雑に積み上げたものである。出土遺物で注目されるものとしては、双頭蕨手文の刻印がある瓦質土器香がや中国産茶入があるが、出土地点から両者は共伴ではなく、別々の土坑からの出土遺物と思われる。遺構の時期はVI期(16世紀後半)に比定される。

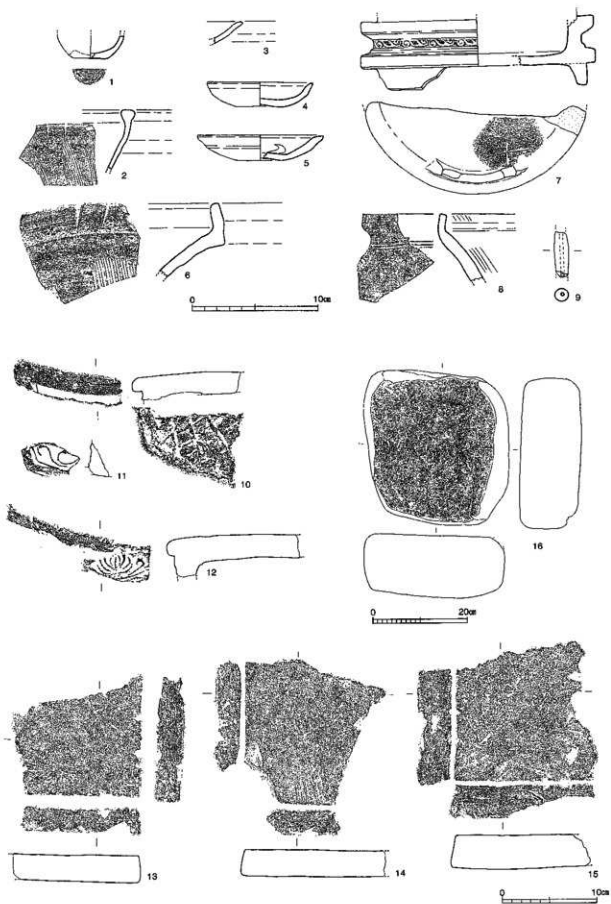
07-SK002出土遺物 (第4-6図)

1は中国産陶器茶入で胴部外面に茶褐色の釉を施す。2は中国産陶器指鉢の口縁部である。3～5は京都承土師器皿で、3は器壁が薄く、他の資料より時代的に古い様相をもつものである。6は

土坑東縁部に石積み

茶入の出土状況

中国産茶入



第4-26図 07-SK002出土遺物実測図(1/3、1/4、1/8)

割付線のある礎石

備前焼播鉢の口縁部である。7・8は瓦質土器で、7は香炉、8は壺である。7は外面に双頭巖手文の刻印を有する。9は管状土錘である。10～12は軒平瓦の破片である。10については瓦当の頸部と平瓦の接着面に格子状の直線を施し、接合を強固にする工夫がなされている。13～15は埴である。16は川原石（安山岩）を使用した礎石と思われる礎である。礎の表面に割付線と推定される「十」字状の刻線が認められる。刻線の交点が礎の中心部に位置していないことや礎の側縁の一部を再加工した痕跡が認められることから、礎石を再利用した後、最終的に土坑に廃棄された資料だと推定される。

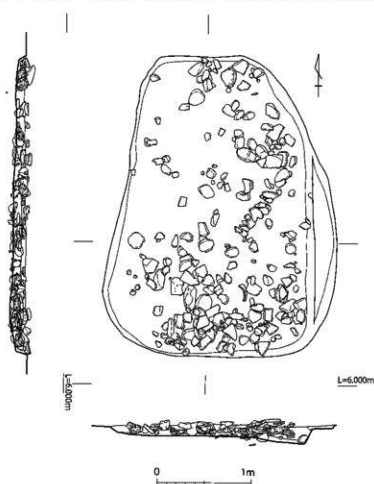
07-SK003 (第4-27図)

廃棄土坑

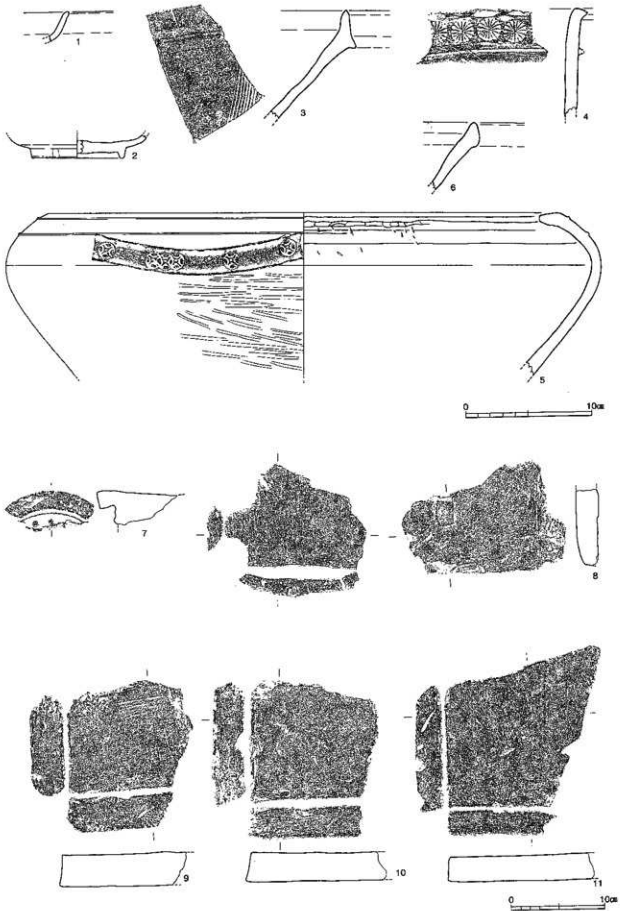
L65区に位置する土坑で、遺構の規模は東西2.4m、南北3.1m、深さ15cmである。溝SD090を切って構築されている。遺構の上面が削平を受けており、遺構の深さが浅くなっている。遺構の内部や埋土中からは、多量の瓦類や礫が廃棄された状態で出土した。遺構の性格は廃棄土坑と推定される。15世紀前半の溝SD090を切っていることや出土遺物に16世紀代に下るものが認められないことから、遺構の年代はIV期（15世紀中頃から後半）に位置づけられる。

07-SK003出土遺物 (第4-28図)

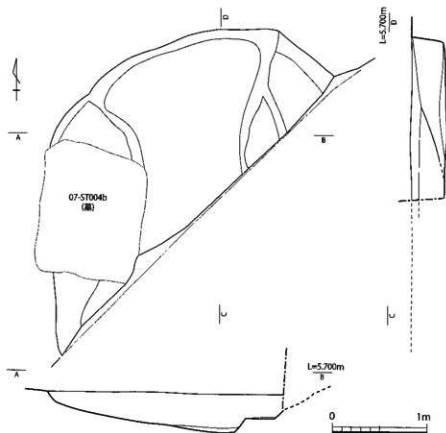
1・2は中国産の青磁で、1は皿、2は碗である。3は備前焼播鉢で、中世4～5期（15世紀代）の製品である。4は瓦質土器長胴形火鉢の口縁部で、口縁外部と口縁部に近い胴部外面に各1条の突帯を有し、突帯間に菊花文の刻印を施す。また、刻印による文様帯の下に1条の沈線があり、当該部位には突帯が剥落した痕跡が認められる。5も瓦質土器の火鉢であるが、口縁部が大きく内湾する器形を呈し、口縁外面の2条の突帯間に刻印による文様を施す。4・5はいずれも15世紀代の製品。6は東播系須恵器鉢の口縁部で、14世紀代に比定される遺物である。7～11は瓦類である。7は軒平瓦の周縁部で、珠文の一部が残存する。8は平瓦で、凸面に小さな方形の隆起が認められる。9～11は埴である。



第4-27図 07-SK003実測図 (1/40)



第4-28图 07-SK003出土物実測図(1/3、1/4)



第4-29図 07-SK004a実測図 (1/40)

07-SK004 a (第4-29図)

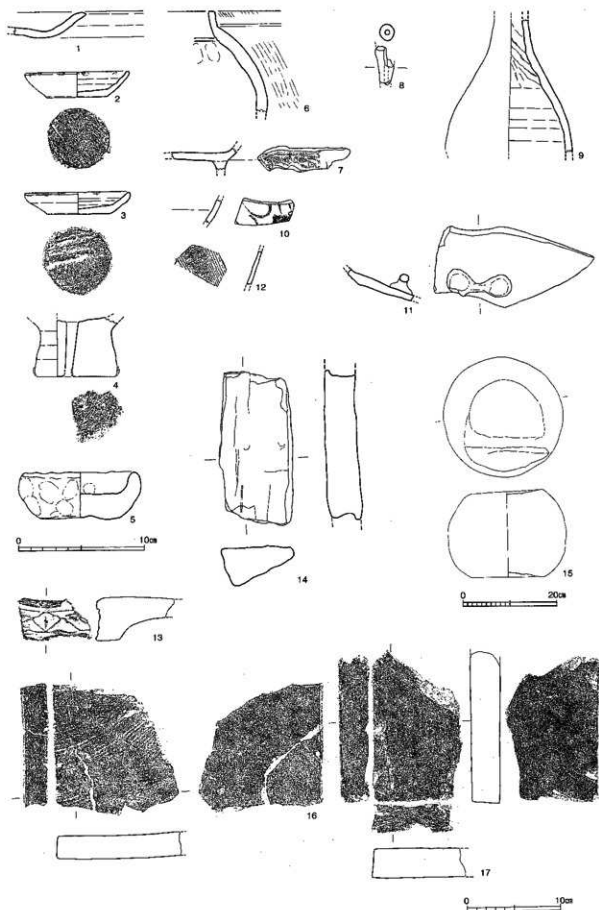
M65～M66区に位置する土坑で、遺構の規模は東西3.0m、南北3.4m、深さ40cmである。検出当初は1基の大型土坑と考えていたが、掘り下げによって、西側に墓(ST004b)が重複していることが判明した。土坑内からは多量の礫が出土し、墓(ST004b)が重複する部位には大型の礫が分布していた。両者の切り合い関係を、土層等で明確にはできなかったが、礫の出土状況からSK004a→ST004bの順で遺構が構築されたと推定される。また、溝SD090を切って構築されている。遺構の性格は廃棄土坑と考えられる。出土遺物には京都系土師器やロクロ目土師器、石塔水輪などの他、漆製品の塗膜があるが、漆塗膜については遺存状態が悪く、取り上げることができなかった。遺構の年代はⅥ期(16世紀後半)に比定される。

廃棄土坑

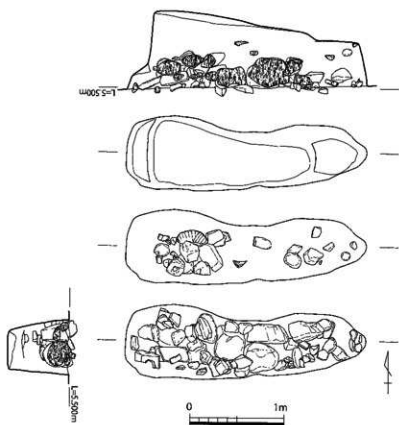
07-SK004 a出土遺物 (第4-30図)

1は京都系土師器の皿で、器壁がやや厚く、新しい傾向をもつ遺物である。遺構の年代を示すもので、16世紀後半に比定される。2・3はロクロ目土師器で、口縁端部にススが付着することから、灯明皿として使用されている。4は土師質土器の燗台で、脚部のみが残存する資料。5は取瓶で、内外面に指頭圧痕が認められる。6は瓦質土器の無頸壺である。7は鉢または火鉢の脚部で、残存部の外面には三重の円をモチーフとする刻印がある。8は管状土錘である。9は備前焼の徳利で、16世紀代の製品。10は斑州窯系の陶器で、壺などの袋物である。外面に鉄絵文様を施し、内面は露胎となる。製作年代は14世紀に比定される。11は中国産褐釉陶器壺の肩部で、耳把手が残存する。12は中国産陶器の攪鉢で、胴部の小破片。13は半截菱形文軒平瓦である。14は磁石で、結晶片岩を素材とする。15は凝灰岩製の五輪塔地輪である。16・17は埴である。

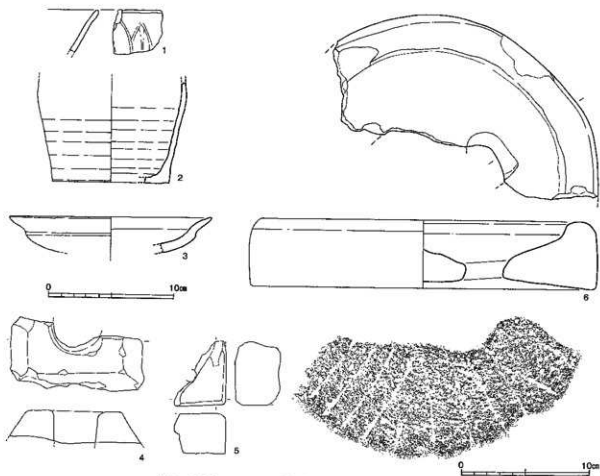
斑州窯系陶器



第4-30図 07-SK004出土遺物実測図(1/3、1/4、1/8)



第4-31図 07-SK005実測図 (1/40)



第4-32図 07-SK005出土遺物実測図 (1/3, 1/4, 1/8)

07-SK005 (第4-31図)

L65～M65区に位置する土坑で、遺構の規模は東西2.55m、南北0.8m、深さ90cmである。平面形態が溝状を呈し、溝SD090・井戸086を切って構築されている。遺構の掘土中位から上位にかけて、多数の礫が充填されたような状態で、びっしりと詰まって出土した。礫の中には石塔類や石臼の破片も認められる。埋土下位からは礫がほとんど出土せず、土壌で埋まっている。遺構の性格は明確ではないが、当初は廃棄土坑（ゴミ坑）として構築されたが、最終的には礫を廃棄する目的で使用された遺構である可能性が考えられる。出土遺物から、遺構の時期はⅥ期（16世紀後半）に比定される。

礫を廃棄する土坑

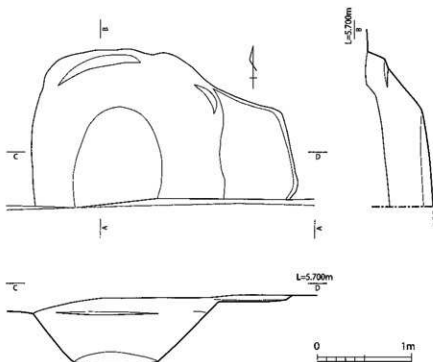
07-SK005出土遺物 (第4-32図)

1は中国龍泉窯系の鎮遠弁文青磁碗である。13世紀の製品で、混入もしくは伝世品と思われる。2は備前焼壺の胴部から底部にかけての大型破片で、16世紀代のもの。3は京都系土師器皿で、遺構の時期を最も確に示す遺物である。4・5は凝灰岩製の石塔類で、4は五輪塔の火輪、5は同じ地輪で、いずれも破片となっている。6は安山岩製の石臼で、これも破片である。

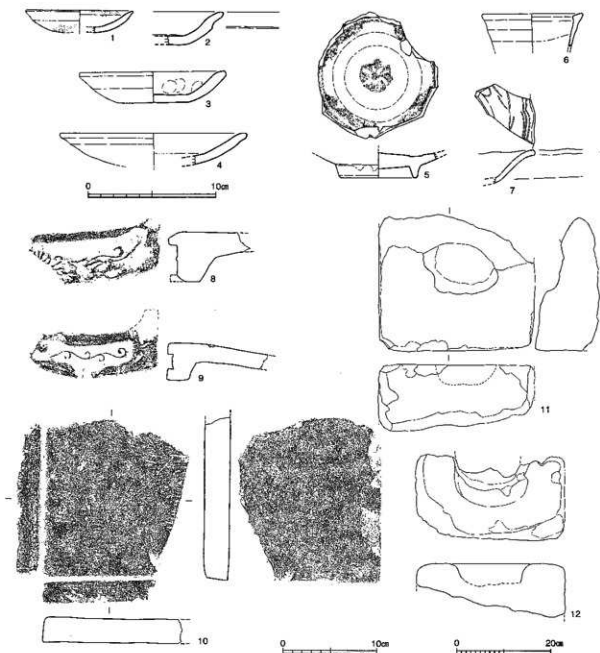
07-SK006 (第4-33図)

L65区に位置する土坑で、遺構の規模は東西2.8m、南北1.65m、深さ70cmである。底部から埋土中位にかけて頭大の礫が多数出土したほか、礫に混じて石塔類の部材も認められた。これらの礫は町家の建物の屋根に、重しとして乗せられていたものである可能性が高い。遺構の性格は礫の廃棄を目的として構築された廃棄土坑と推定される。出土遺物から、遺構の時期はⅥ期（16世紀後半）に比定される。

礫を廃棄する土坑



第4-33図 07-SK006実測図 (1/40)

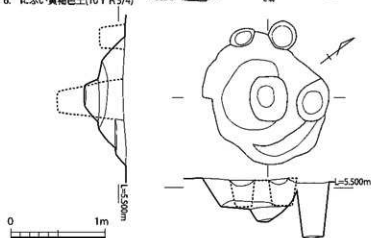


第4-34図 07-SK006出土遺物実測図(1/3、1/4、1/8)

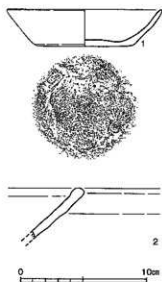
07-SK006 出土遺物 (第4-34図)

1～4は京都系土師器の皿で、16世紀後半に比定される製品である。1の口縁端部にはススの付着が認められ、当該資料が灯明皿として使用されたことがわかる。5は漳州窯系青花の碗で、見込みが蛇ノ目軸割ぎとなる。16世紀後半から末葉に比定される製品。6は中国産青磁香炉の口縁部から胴部にかけての破片である。胴部内面の下半部は露胎となる。7は中国産青磁の皿で、内面に線刻による文様が認められる。15世紀代の製品である。8～10は瓦類で、8は蕪華唐草文軒平瓦、9は宝珠唐草文軒平瓦、10は塼である。9の右袖部には突起が存在した痕跡がある。11・12は五輪塔の地輪で、上面に水輪を固定するための円形もしくは方形の凹みが設けられている。いずれも凝灰岩製である。

1. 灰白色土(10Y R7/1)
2. 灰色色土(10Y R7/1)
3. にぶい黄褐色土(10Y R6/3)
4. にぶい橙褐色土(10Y R5/3)
5. にぶい黄褐色土(10Y R4/3)
6. にぶい黄褐色土(10Y R5/4)



第4-35図 07-SK010実測図(1/40)



第4-36図 07-SK010出土遺物実測図(1/3)

07-SK010 (第4-35図)

M65区に位置する土坑で、遺構の規模は東西1.4m、南北1.2m、深さ30cmである。SK053・SK076と切り合い関係を有し、遺構の構築順序はSK076→SK053→SK010である。小さなピットや柱穴に切られてはいるが、周囲の土坑の中では最も新しい。なお、土層断面に坑の痕跡が認められるが、これは新しい時期の擾乱である。遺構の性格は廃棄土坑であろう。出土遺物には埋土上面から土師質土器坏などが少量出土している。出土遺物は14世紀代のものに限られるが、遺構の切り合い関係から、遺構の時期はⅣ期(15世紀中頃から後半)に比定される。

廃棄土坑

07-SK010出土遺物(第4-36図)

1は土師質土器の坏で、14世紀に比定される資料である。2は瓦質土器鉢の口縁部である。

07-SK022 (第4-37図)

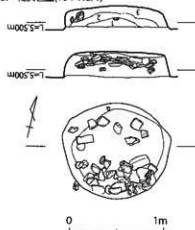
M65～N65区に位置する土坑で、遺構の規模は東西1.1m、南北1.0m、深さ28cmである。溝SD288および土坑SK042・SK056と切り合い関係を有し、最も新しく構築された遺構である。土坑内部からは瓦質土器や瓦類が出土した。遺構の性格は廃棄土坑であろう。出土遺物は14世紀代のものが多いが、溝や他の土坑との切り合い関係を重視して、Ⅳ期(15世紀中頃～後半)に比定しておきたい。

廃棄土坑

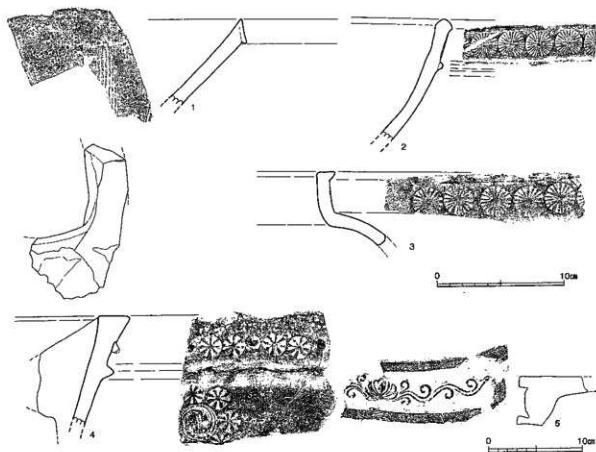
07-SK022出土遺物(第4-38図)

1は備前焼播鉢の口縁部で、中世4期a(14世紀前半)に比定される製品である。2～4は瓦質土器の火鉢または風炉で、外面に

1. 灰褐色土(10Y R5/2)
2. 暗灰黄色土(2.5Y 5/2)
3. 褐灰色土(10Y R5/1)



第4-37図 07-SK022実測図(1/40)



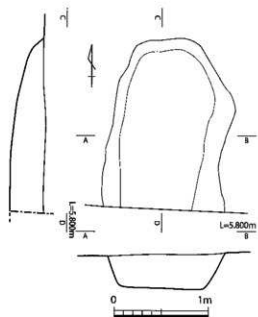
第4-38図 07-SK022出土遺物実測図(1/3、1/4)

菊花文などの刻印文様が施されている。5は蓮華唐草文軒平瓦で、断面が段額となり、瓦当文様右端の唐草が途切れている特徴をもつ資料である。

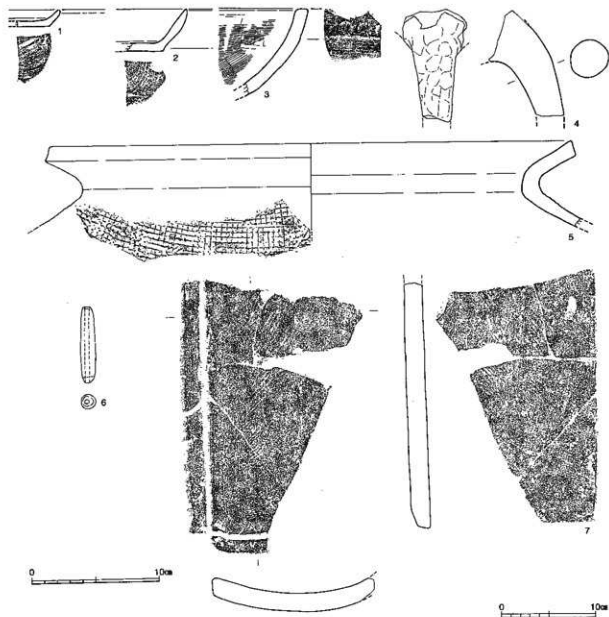
07-SK024 (第4-39図)

M65～N65区に位置する土坑で、遺構の規模は東西1.3m、南北1.8m、深さ35cmである。溝SD288と切り合い関係を有し、この溝を切つて構築されている。遺構は上面に削平を受け、浅くなっている。遺構の内部からは礫の出土が目立つが、礫の大半は華大から頭大の凝灰岩であった。従つて、当該遺構は周辺で行われた凝灰岩の加工に際し、その破片や残滓を処理するために構築された土坑である可能性が高い。出土遺物には16世紀以降のものはなく、14世紀代のものが目立つが、切り合い関係を重視する限り、その構築年代は14世紀には遡らない。従つて、遺構の年代はⅣ期(15世紀中頃から後半)を考へておきたい。

凝灰岩の破片や残滓を処理する
土坑



第4-39図 07-SK024実測図(1/40)



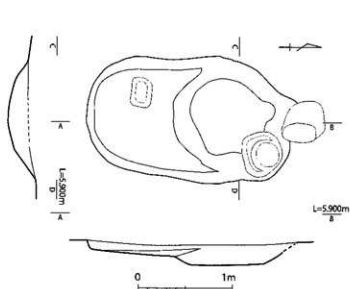
第4-40図 07-SK024出土遺物実測図(1/3、1/4)

07-SK024出土遺物(第4-40図)

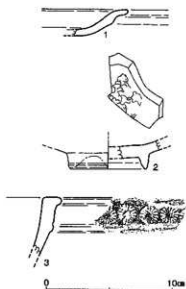
1は土師質土器の小皿、2は土師質土器の坏で、いずれも14世紀代の製品である。3は瓦質土器の火鉢または鉢で、口縁部外面に菊花文の刻印を施す。4は瓦質土器足鏝の脚部である。5は束播系須恵器の甕で、胴部外面に格子状の叩き目が認められる。これも14世紀代の製品である。6は管状土鏝、7は平瓦である。

07-SK034(第4-41図)

M65区に位置する土坑で、遺構の規模は東西1.35m、南北2.2m、深さ20cmである。検出時にひとつの土坑と認識していたが、調査後の平面形態から、少なくとも2基の土坑が切り合っていることが判明した。出土遺物は少量に留まるが、遺構の性格は廃棄土坑と思われる。出土遺物に京都系土師器があることから、遺構の年代はⅤ期(16世紀後半)に比定される。



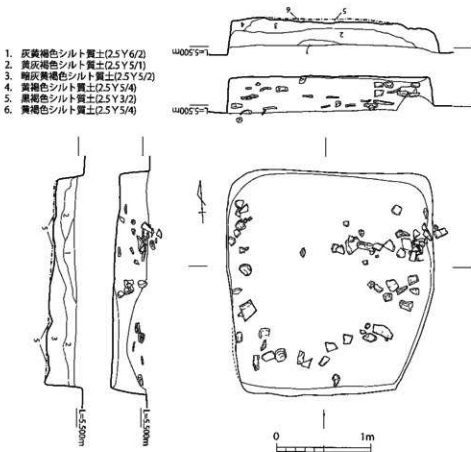
第4-41図 07-SK034実測図 (1/40)



第4-42図 07-SK034出土遺物実測図 (1/3)

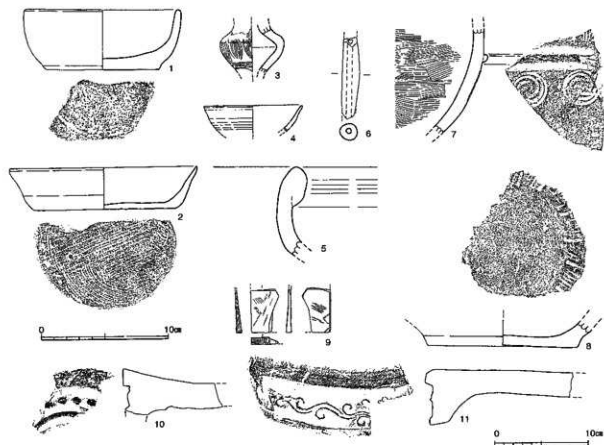
07-SK034出土遺物 (第4-42図)

1は京都系土師器皿で、16世紀後半に比定される。2は中国龍泉窯系青磁碗の底部で、見込みに印花文を施す。15世紀代の製品。3は瓦質土器の火鉢で、口縁部外面に菊花文の刻印をもつ。



1. 灰黄褐色シルト質土(2.5Y6/2)
2. 黄灰褐色シルト質土(2.5Y5/1)
3. 暗灰黄褐色シルト質土(2.5Y5/2)
4. 黄褐色シルト質土(2.5Y5/4)
5. 黒褐色シルト質土(2.5Y3/2)
6. 黄褐色シルト質土(2.5Y5/4)

第4-43図 07-SK039実測図 (1/40)



第4-44図 07-SK039出土遺物実測図(1/3、1/4)

07-SK039 (第4-43図)

M65区に位置する土坑で、遺構の規模は東西2.2m、南北2.35m、深さ34cmである。遺構の平面形態は略方形を呈し、14世紀末から15世紀前半の溝SD288を切って構築されている。遺構の性格は廃棄土坑と思われる。出土遺物には14世紀代ものが一定量を占めるが、切り合い関係等を重視して、遺構の年代はIV期(15世紀中頃～後半)を考慮しておきたい。

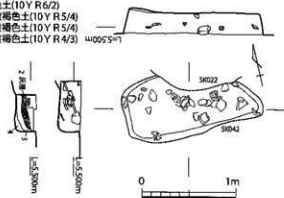
07-SK039 (第4-44図) 出土遺物

1・2は土師質土器の坏。1は類例の少ない資料であるが、口縁が内湾気味に立ち上がるもので、15世紀代の製品であろう。2は箱形の形態を呈する14世紀代のものである。3は古瀬戸中期様式の花瓶で、14世紀後半の製品。外面には黒褐色の鉄釉を施し、胴部外面に刻印文様が認められる。4は古瀬戸様式の坏である。5は備前焼大甕の口縁部である。6は管状土錘である。7は瓦質土器の釜または火鉢で、胴部外面の中位に1条の突帯を有するほか、突帯の上下に刻印による文様を施す。突帯下の刻印文様は巴文である。8は瓦質土器播鉢の底部である。9は砥石の小破片で、砂岩が使用されている。10は軒丸瓦、11は蓮華唐草文軒平瓦である。

07-SK042 (第4-45図)

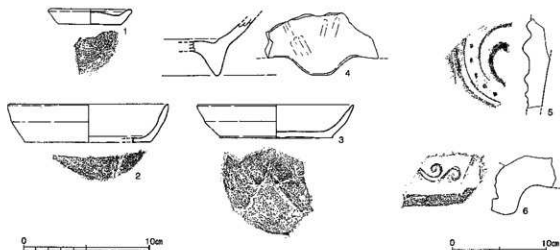
M65～N65区に位置する土坑で、遺構の規模は東西1.5m、南北0.7m、深さ22cmである。14世紀末から15世紀前半の溝SD288を切って構築されているほか、周辺の土坑とも切り合い関係を有する。遺構の構築順序は、SD288→SK066→SK042→SK022である。掘土は3層に分かれ、そのうち中位の層は灰層となる。土坑内部から土器や瓦類が一定量出土することから、遺構の性格は廃棄土坑と推定される。出土遺物は14世紀代のものが大半を占めるが、切り合い関係等を重視して、遺構の年代はⅣ期(15世紀中頃～後半)に比定される。

1. 灰黄褐色土(10Y R6/2)
2. にぶい黄褐色土(10Y R5/4)
3. にぶい黄褐色土(10Y R5/4)
4. にぶい黄褐色土(10Y R4/3)



第4-45図 07-SK042実測図(1/40)

掘土中位に
灰層



第4-46図 07-SK042出土遺物実測図(1/3、1/4)

07-SK042出土遺物 (第4-46図)

1は土師質土器の小皿、2・3は土師質土器の坏で、いずれも14世紀の資料である。4は瓦質土器の火鉢で、脚部の破片である。5は軒丸瓦、6は軒平瓦の破片である。

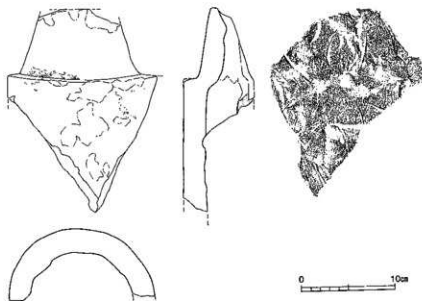
07-SK053

M65区に位置する土坑で、遺構の規模は東西2.8m、南北1.45m、深さ30cmである。14世紀末から15世紀前半の溝SD288を切って構築されているほか、土坑07-SK010に切られている。周辺の土坑などとも切り合い関係を有し、遺構の構築順序はSD288→SK053→SK010である。出土遺物は少量であるが、瓦片などが出土している。出土遺物のみでは年代比定は困難であるが、切り合い関係などから、遺構の年代はⅣ期(15世紀中頃～後半)に比定される。

赤色顔料の
付着

07-SK053出土遺物 (第4-47図)

図示した遺物は丸瓦で、玉縁と丸瓦部の接合部付近に赤色顔料の付着が認められる。

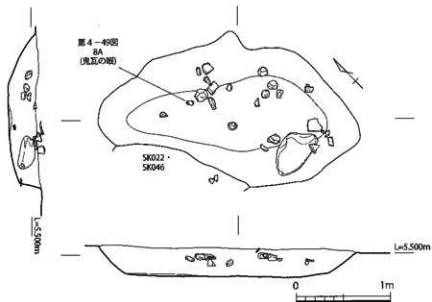


第4-47図 07-SK053出土遺物実測図(1/4)

07-SK056 (第4-48図)

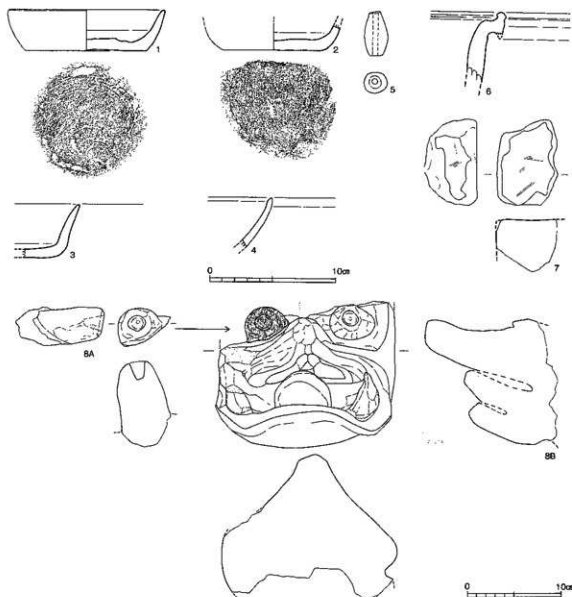
M65区に位置する土坑で、遺構の規模は東西15m、南北2.8m、深さ30cmである。14世紀末から15世紀前半の溝SD288を切って構築されているほか、周辺の墓・土坑なども切り合い関係を有する。遺構の構築順序は、ST078→SD288→SK043→SK022である。埋土には遺物の他、礫が少量含まれる。出土遺物には瓦・陶磁器・土器・砥石などがあるが、いずれも小片である。瓦の中には鬼瓦の眼(第4-49図8A)があり、当該遺物は中世大友府内町跡第29次調査SD011出土の鬼瓦¹⁾と接合した(同8B)。約35m離れた地点からの接合である。出土遺物には14世紀代と15世紀代ものが混在するが、切り合い関係などから、遺構の年代はIV期(15世紀中頃～後半)に比定される。

鬼瓦の接合



第4-48図 07-SK056実測図(1/40)

新1) 大分県教育庁歴史文化財センター【豊後府内12】(2009年) 第4-10図45、127頁



第4-49図 07-SK056出土遺物実測図(1/3、1/4)

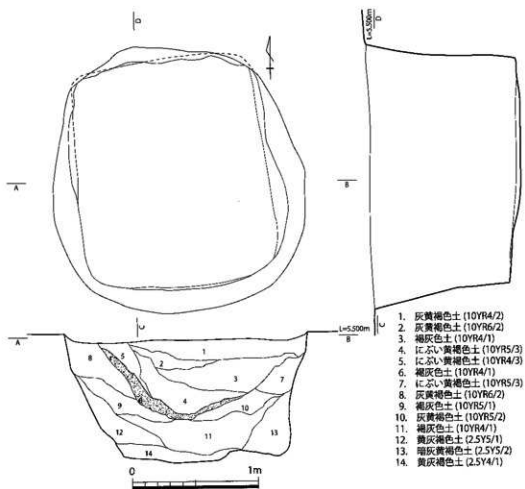
07-SK056出土遺物 (第4-49図)

鬼瓦の破
 (中世大友
 府内町跡
 第29次調
 査と接合)

1～3は土師質土器の坏で、1・2は14世紀代、3は15世紀代に比定される。4は中国産の黒軸陶器碗の口縁部で、14～15世紀代の製品である。5は管状土鏡、6は14世紀代の常滑産陶器大甕の口縁部である。7は砥石で、素材は砂岩である。8Aは鬼瓦の腹部(右目)で、中世大友府内町跡第29次調査SD011出土の鬼瓦と接合した(8B)。

07-SK062 (第4-50図)

O65区に位置する大型の土坑で、遺構の規模は東西2.0m、南北2.1m、深さ98cmである。検出直後は円形プランの遺構である可能性を考えていたが、掘り下げを進めると、平面形態は略方形であったことが判明した。土層の観察によると、埋土がレンズ状に堆積していることから、構築当初は土坑の上部が開放された状態であったが、時間の経過とともに内部が徐々に埋まっていったこと



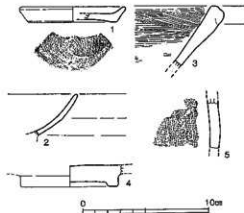
第4-50図 07-SK062実測図 (1/30)

を示している。埋土中位に焼土や炭化物の堆積が認められることも大きな特徴である。この遺構とほぼ同様な規模で、同じような埋土の堆積が認められる遺構 (07-SK064) がSK062の西約3mの地点に位置している。出土遺物には土器や陶磁器類があるが、いずれも小片で、量も少量に留まる。遺構の性格は不明であるが、後述するように、墓地に伴う祭祀遺構と推定している。出土遺物から、遺構の構築年代はⅠ～Ⅱ期 (14世紀前半～末) に比定される。

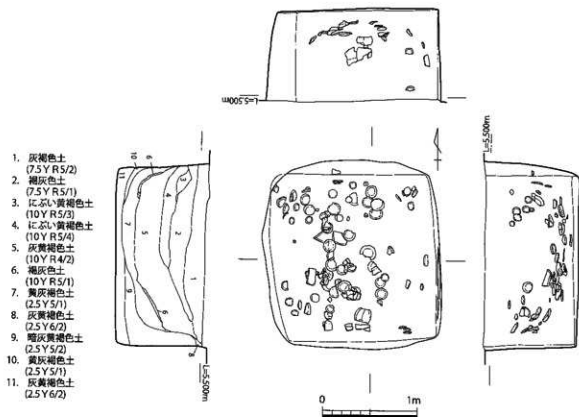
墓地に伴う
祭祀遺構

07-SK062出土遺物 (第4-51図)

1は土師質土器小皿で、14世紀代に比定される。2は吉備系土師器塚で、14世紀初頭から前半の製品である。3は瓦質土器の鉢で、内面に刷毛目状の調整が施される。4は中国産の青磁碗底部で、14～15世紀の資料である。5は焼塩壺の小片で、内面に布目痕が認められる。8～9世紀代のもので、混入品であろう。



第4-51図 07-SK062出土遺物実測図 (1/3)



第4-52図 07-SK064実測図 (1/40)

07-SK064 (第52図)

O65区に位置する大型の土坑で、遺構の規模は東西1.95m、南北2.0m、深さ98cmである。遺構の平面形態は略方形を呈する。埋土はレンズ状に堆積し、炭化物などを部分的に含む層も認められる。また、埋土下位からは土師質土器を主体とする遺物が大量に出土した。遺構の平面プランや埋土の堆積状況は前述したSK062と類似するが、出土遺物が多量に認められることが異なる点である。当該遺構も墓地に伴う祭祀遺構と推定している。出土遺物から、遺構の構築年代はⅠ～Ⅱ期(14世紀前半～末)に比定される。

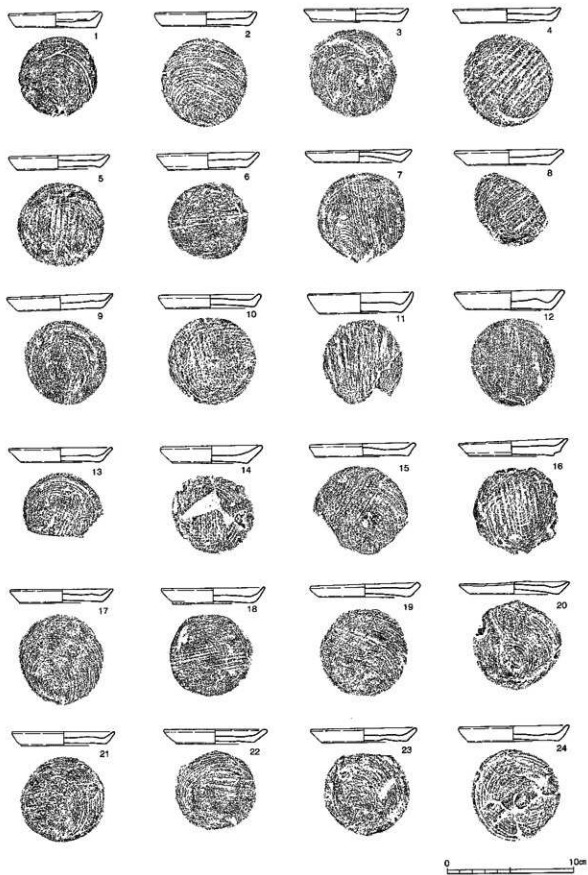
墓地に伴う
祭祀遺構

07-SK064出土遺物 (第4-53図～第4-57図)

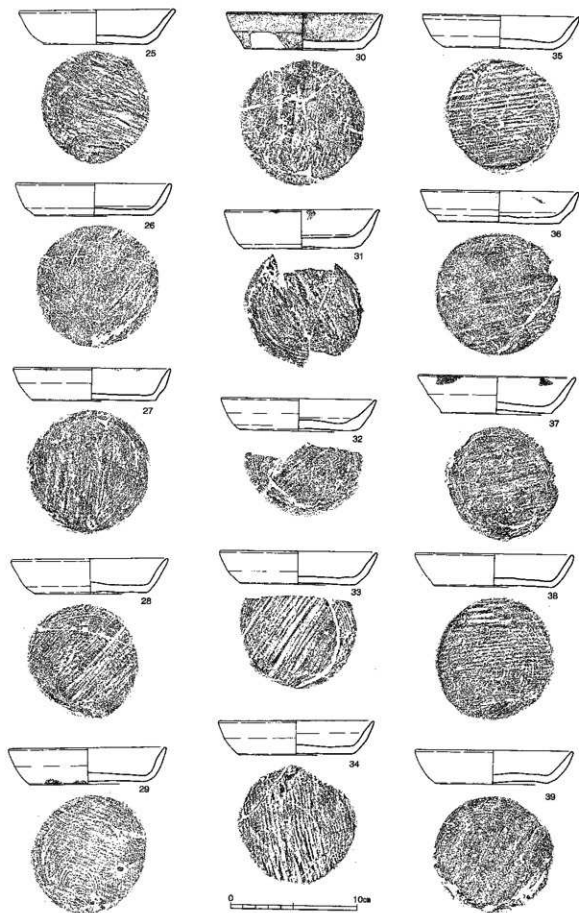
1～24は土師質土器小皿である。底部には右回転の糸切り痕があり、一部の資料は糸切り痕のみが認められるが、その他の大半の資料には糸切り痕の後に板状圧痕が認められる。25～68は土師質土器坏で、これらの底部にも右回転の糸切り痕がある。坏の底部についても、一部の資料は糸切り痕のみが認められるが、その他の大半の資料には糸切り痕の後に板状圧痕が認められる。坏についてはススが附着するものも多く認められ、これらについては灯明皿として使用されたものである。また、68についてはL線全周を打ち欠くことによって口縁部を再生している。69は京都産土師器で、京都で「ⅢS」に分類されている器形を呈する資料である。70は中国龍泉窯系青磁の鉢で、外面に篩選弁が認められる13世紀代の製品。71は信楽系陶器鉢で、後述するST120と同一一体である可能性が考えられるが、接合していない。13～14世紀代に比定される。72・73は東播磨須恵器の鉢で、73の底部には糸切り痕が認められる。74は砥石で、砂岩を素材とする。75～77は銅銭である。

打ち欠きによる口縁部の再生

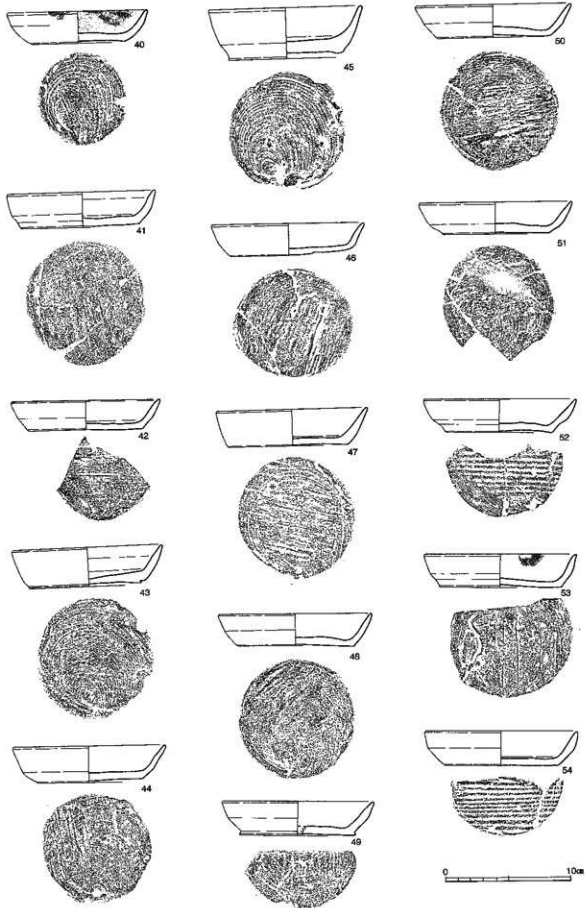
京都産土師器



第4-53図 07-SK064出土遺物実測図①(1/3)

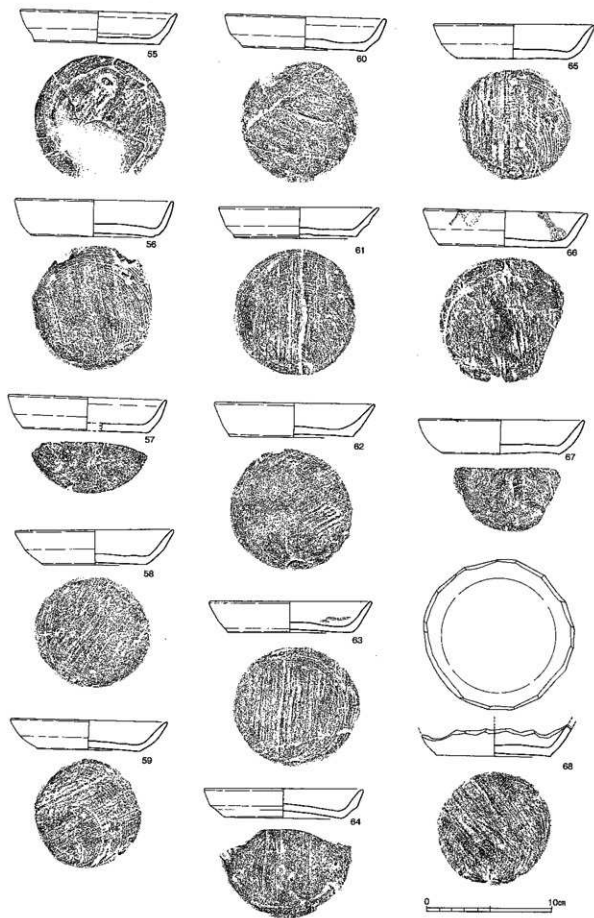


第4-54図 07-SK064出土遺物実測図② (1/3)

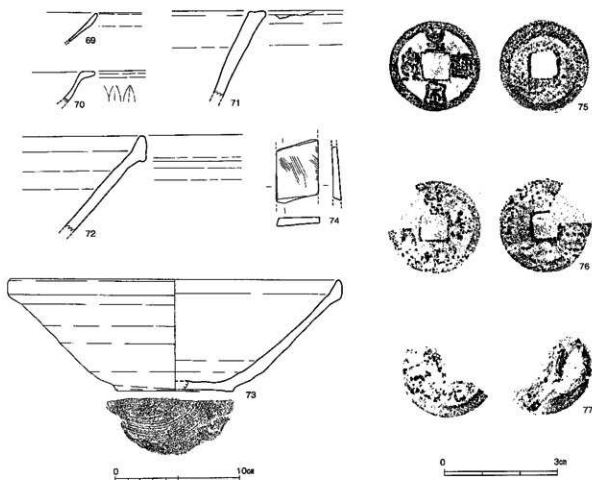


第4-55图 07-SK064出土遺物実測図③ (1/3)

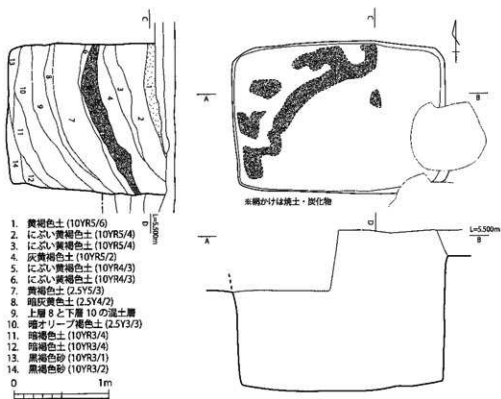
第4章 旧万寿寺跡第7次調査



第4-56図 07-SK064出土遺物実測図③ (1/3)



第4-57図 07-SK064出土遺物実測図⑤ (1/3、1/1)

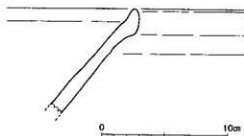


1. 黄褐色土 (10YR5/6)
2. にじみ黄褐色土 (10YR5/4)
3. にじみ黄褐色土 (10YR5/4)
4. 灰黄褐色土 (10YR5/2)
5. にじみ黄褐色土 (10YR4/3)
6. にじみ黄褐色土 (10YR4/3)
7. 黄褐色土 (2.5Y5/3)
8. 暗灰黄色土 (2.5Y4/2)
9. 上層 8 と下層 10 の混土層
10. 暗オリーブ褐色土 (2.5Y3/3)
11. 暗褐色土 (10YR3/4)
12. 暗褐色土 (10YR3/4)
13. 黒褐色砂 (10YR3/1)
14. 黒褐色砂 (10YR3/2)

第4-58図 07-SK115実測図 (1/40)

07-SK115 (第4-58図)

N64～O64区に位置するやや大型の土坑で、遺構の規模は東西2.25m、南北1.6m、深さ170cmである。土層の観察によると、遺構は南側から埋められていることがわかり、埋土の中位には焼土塊を多く含む層が確認できる。このような土層の堆積状況が認められるものは、当該遺構が唯一のものである。出土遺物には非常に少なく、混入品とされる土器類の破片が存在するのみである。



第4-59図 07-SK115出土遺物実測図(1/3)

墓地に伴う
祭祀遺構

ある。遺構の性格については断定できないが、遺構の位置関係などから、墓地に伴う祭祀遺構と推定している。遺構の状況や出土遺物などから、その年代はⅠ～Ⅱ期(14世紀前半～後半)と推定している。

07-SK115出土遺物(第4-59図)

図示した遺物は東播系須恵器鉢の口縁部で、14世紀代の製品である。

3 井戸

07-SE086(第4-60図)

L65～M65区に位置する井戸である。14世紀末から15世紀前半の溝SD090、16世紀後半の土坑SK002およびSK005など、周辺の遺構すべてに切られている。井戸の掘形は径2.4～2.6mの略円形を呈し、その内部に東西0.85m、南北0.7mの長方形の井筒が検出された。井筒の平面形態や土層断面を詳細に検討すると、井筒の四隅には方柱状の隅柱が立てられていた痕跡が確認できた。さらに、井筒の内部には径約0.3mほどの円形の掘り込みが認められ、曲物が設置されていた可能性が考えられる。以上の状況から、この遺構は「方形縦板組隅柱横棧型」⁴⁾に分類される井戸であることが判明した。円形の掘形の底面には、重複する2箇所の井筒が重複して検出されていることから、当該井戸の井筒は少なくとも1回、大きな改修が行われていることも確認できる。さらに、断ち割りによって土層を観察すると、掘形の埋土中に井筒のプランが明瞭に確認できることから、この井戸は井筒に使用された木材が抜き取られていない状態で掘設されたことがわかる。井戸の埋設にかかわる行為の痕跡は、特に観察できなかった。また、井筒や掘形の埋土中から完形に近い土師質土器の小皿や坏が出土しており、これらの遺物は井戸の構築の際に行われた祭祀にかかわる遺物であった可能性も考えられる。井戸SE086については、遺構の切り合い関係や出土遺物などから、その構築年代はⅠ期(14世紀前半)と考えられる。

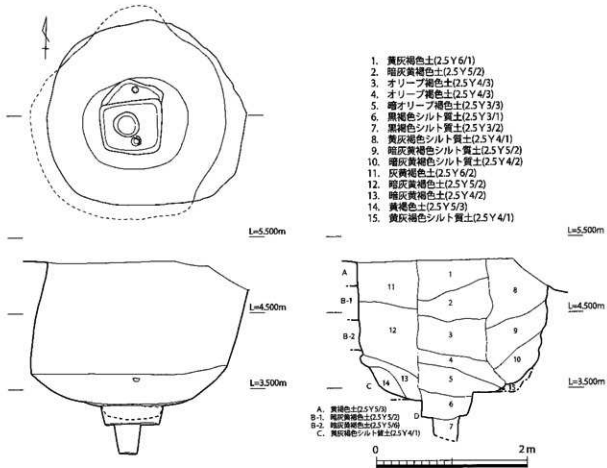
方形縦板組
隅柱横棧型

井戸構築時の
祭祀行為

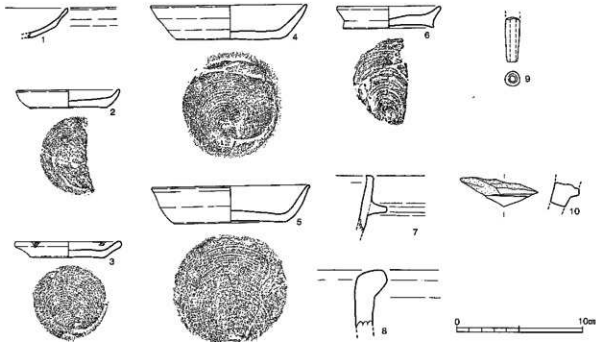
07-SE086出土遺物(第4-61図)

1～5はSE086の井筒埋土から出土した遺物で、1は吉備系土師器碗の口縁部、2・3は土師質土器小皿、4・5は土師質土器坏である。3の小皿には口縁端部にススの付着が認められる。また、3の小皿、4の坏が井戸構築時の祭祀の際に使用された可能性が考えられる遺物であることは、前述した。6～10はSE086の掘形裏込めから出土した遺物で、6は土師質土器小皿、7は瓦質土器鍋の口縁部、8は備前焼の壺の口縁部、9は管状土鉢、10は滑石製石鍋の破片である。

註2) 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所「草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅴ」(1996年)

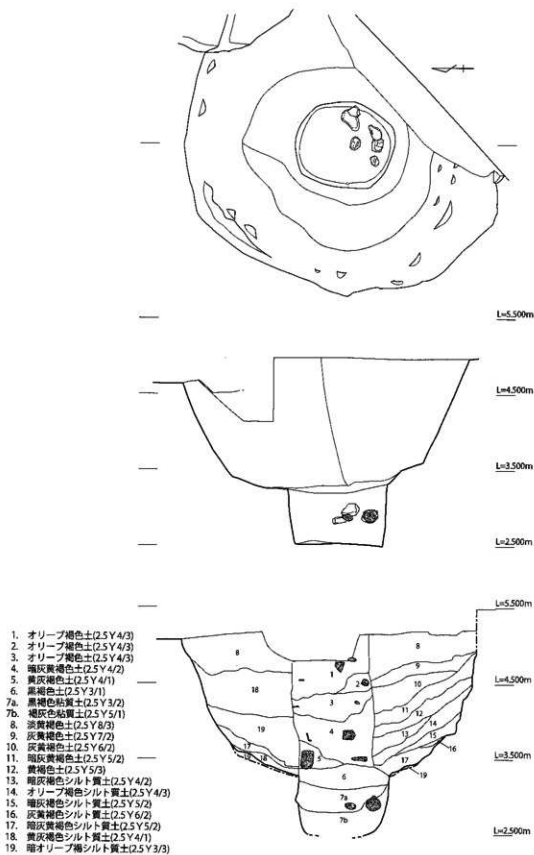


第4-60図 07-SE086実測図 (1/50)

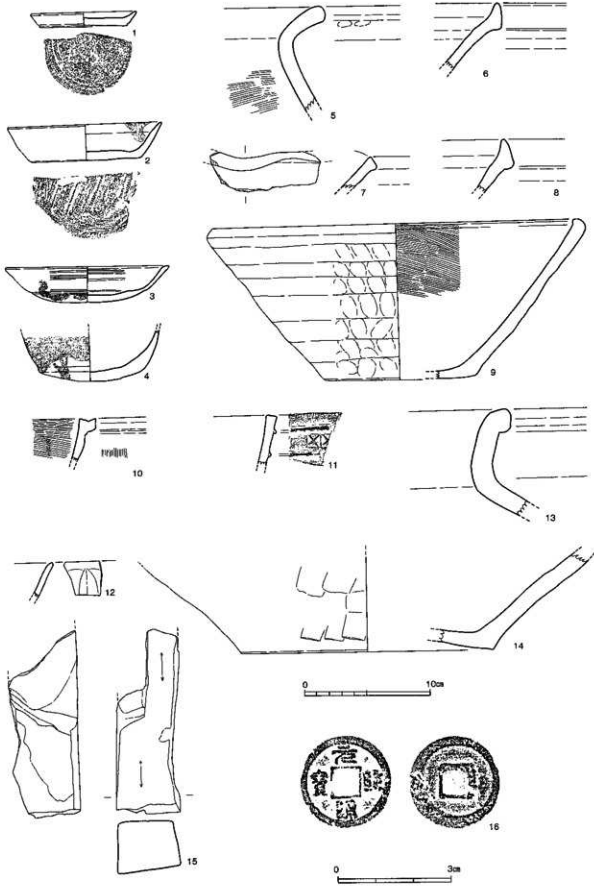


第4-61図 07-SE086出土遺物実測図 (1/3)

第4章 旧万寿寺跡第7次調査



第4-62図 O7-SE087実測図(1/50)



第4-63図 07-SE087出土遺物実測図 (1/3、1/1)

07-SE087 (第4-62図)

L65・66～M65・66区に位置する井戸である。16世紀後半に比定されるSK001・002・004と切り合い関係を有し、これら土坑から切られている。井戸の掘形は径約4.4m、深さ1.6mを測る大型の略円形で、その内部に東西1.2m、南北1.15m、深さ80cmの略円形を呈する井側の痕跡が検出された。井側部分を掘り下げると、その底面付近から木片と拳大の礫が出土した。土層断面の検討によって、井筒には円柱状の木製品が使用されていたことが推定されるが、それが曲物であるのか、結核であるのかは判断できなかった。さらに、断ち割りによって土層を観察すると、掘形の堀土中に井側のプランが明瞭に確認できることから、この井戸は井側に使用された井筒が抜き取られていない状態で埋設されたことがわかる。井戸の埋設にかかわる行為の痕跡は、特に確認できなかった。井戸の掘形や井側の埋土中より、陶磁器や土器、磁石、銅銭などが出土している。なお、調査の序盤で、SE087の上面から土坑状の掘り込みを検出しており、当該部位からの出土遺物をS008として取り上げた。しかしながら、この掘り込みはSE087の井側の位置と完全に一致しており、これらの遺物は本来SE087に帰属するものと判断した。井戸SE087については、遺構の切り合い関係や出土遺物などから、その構築年代はⅡ期(14世紀中頃～末)と考えられる。

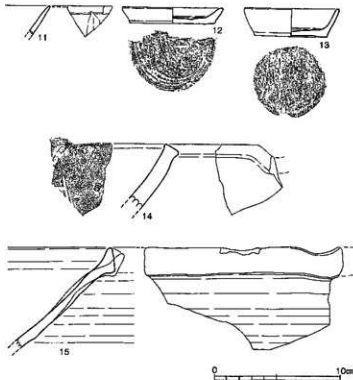
井筒が曲物か結核かは不明

S008

07-SE087・07-S008出土遺物 (第4-63図・第4-64図)

第4-63図1～16はSE087の出土遺物である。1は土師質土器小皿、2は土師質土器坏で、2の口縁内面にはスの付着が認められる。3～5は混入品と思われる土師器で、いずれも8～9世紀代に比定される資料である。3は坏で、内外面にヘラ磨きが認められ、胴部の下半部外面にはスが付着が認められる。4も坏であるが、底部が完全な平底ではなく、やや不安定で、口縁部を欠損する。胴部外面から底部にかけて、顕著なスが付着が認められる。

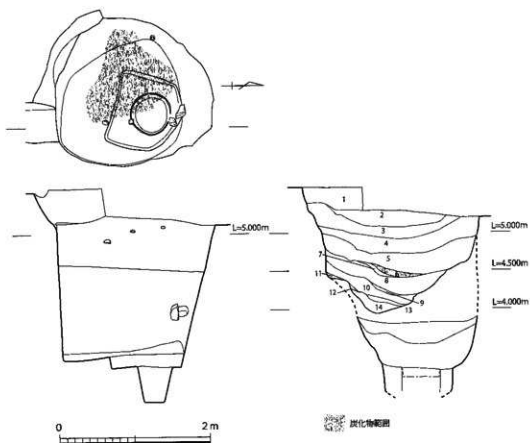
3～5は8～9世紀代の混入品



第4-64図 07-S008出土遺物実測図 (1/3)

5は妻の口縁部から肩部の破片で、肩部内面には刷毛目調整が施される。6～8は東播磨系須恵器の口縁部で、14世紀代の製品である。9は瓦質土器鉢で、外面に指頭圧痕、内面に刷毛目状の調整痕が認められる。10は瓦質土器火鉢の口縁部、11は瓦質土器火鉢の口縁部である。12は龍泉窯系備前弁文青磁碗の口縁部で、13世紀代の製品。13は備前焼大甕の口縁部、14は常滑焼大甕の底部である。15は磁石で、砂岩を素材とする。16は銅銭である。

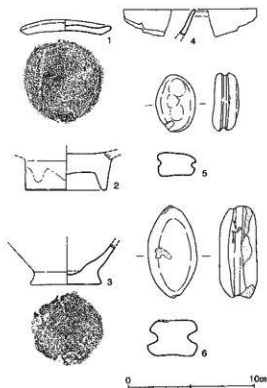
第4-64図11～15はS008として取り上げた遺物である。11は龍泉窯系備前弁文青磁碗の口縁部である。12・13は土師質土器小皿で、底部に糸切り痕が認められる。14は備前焼鉢の口縁部で、当該資料は中世3期b(14世紀後半～15世紀前半)まで下る資料である。15は東播磨系須恵器で、14世紀代に比定される。



第4-65図 07-SE107実測図 (1/50)

07-SE107 (第4-65図)

M64区に位置する井戸である。14世紀末から15世紀前半の溝SD288に切られている。井戸の掘形は径約2.0～2.4mの略円形プランを呈し、深さは2.25mである。掘形の掘土は上層と下層に分かれ、上下の層界は整合する。上層の一部には灰が堆積しており、それらは西側から投げ込まれた状況が確認できる。下層には褐色土などがレンズ状に堆積する状況が認められた。土層の観察から、上層の各土層土は井戸に使用されていた井筒が抜き取られた坑に堆積したものと判断できる。さらに掘り下げを進めると、掘形の底面には東西1.1m、南北0.9m、深さ12cmの略長方形プランの掘り込みとその内部に径0.5m、深さ50cmを測る略円形プランの水溜めの痕跡が確認された。以上のことから、当該遺構は「方形縦板組溝柱横棧型」の構造を有する井戸で、

方形縦板組
溝柱横棧型

第4-66図 07-SE107出土遺物実測図 (1/3)

水溜りに使用された器物は曲物であったと想定される。井筒で使用された木材は、井戸の廃絶時に抜き取られたと思われる。出土遺物は少量であるが、埋土中から土器や土録などが出土している。切り合い関係や出土遺物から、遺構の構築年代はⅠ～Ⅱ期（14世紀前半～後半）に比定される。

07-SE107出土遺物（第4-66図）

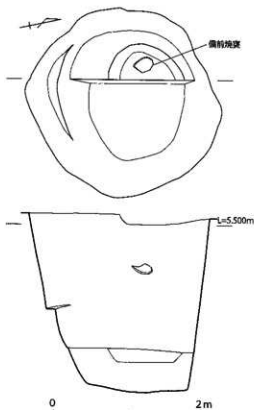
1は土師質土器小皿で、底部には糸切り痕が認められる。14世紀代に比定される。2は中国産の白磁碗の底部で、12世紀代の製品。3は土師質土器の鉢で、底部には糸切り痕が認められる。12世紀代の遺物と推定される。4は混入品と思われる緑釉陶器の口縁部で、8～9世紀代に比定される。5・6は有溝土錘である。

07-SE1002（第4-67図）

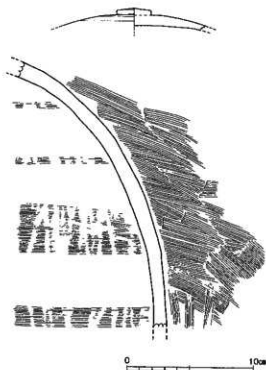
P65区に位置する井戸である。井戸の掘形は径約2.4～2.65mの略円形プランを呈し、深さは2.3mである。遺構の東半分は、大分市教育委員会が2004年に実施した確認調査（中世大友府内町跡第46次調査）すでに掘削済みであった。検出面より約40cm掘り下げたところで、井筒の痕跡と思われる径1mほどの円形プランの掘り込みを確認し、その内部から備前焼大甕の胴部破片が出土した。井筒に使用された井筒は結構であった可能性が高いと思われるが、遺構の状況からはそれを断定することはできなかった。掘形や井筒の埋土中から遺物が少量出土した。出土遺物には詳細な時期を決定するものがないが、遺構の構築時期はⅤ～Ⅵ期（16世紀前半～後半）である可能性が高い。

07-SE1002出土遺物（第4-68図）

1は須恵器碗の蓋で、天井部に溝みを有する。8～9世紀代の資料であるため、混入品であろう。2は備前焼大甕の胴部破片で、内外面には刷毛目状工具による調整痕が認められる。その年代は特定できないが、14～16世紀の製品であろう。

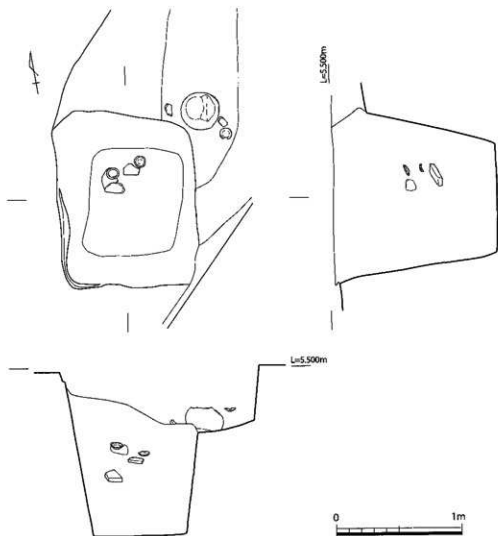


第4-67図 07-SE1002実測図 (1/50)



第4-68図 07-SE1002出土遺物実測図 (1/3)

大分市教育
委員会に
よる調査
(中世大友
府内町跡第
46次調査)



第4-69図 07-ST004b実測図 (1/30)

4 墓

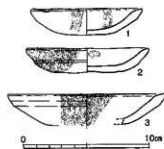
07-ST004b (第4-69図)

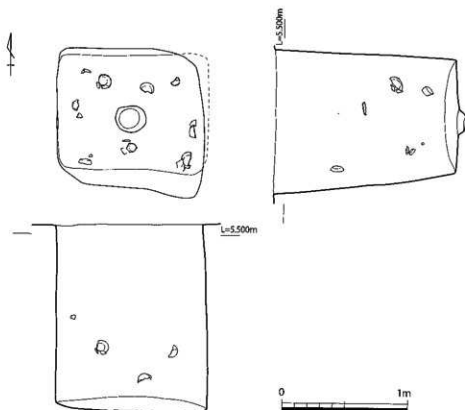
M65～M66区に位置する遺構で、その規模は東西1.1m、南北1.35m、深さ1.3mである。遺構の平面形態は略長方形を呈し、16世紀後半の土坑SK004を切って構築されている。堀土中から完形に近い京都系土師器皿が2枚出土しており、いずれも口縁端部に打ち欠きがある。堀土には小礫を多く含み、また検出時の上面はやや大型の礫で覆われていた。人骨などは出土しなかったが、遺構の状況から座箱を埋設した墓坑と推定される。出土遺物から、遺構の構築時期はVI期(16世紀後半)と推定される。

打ち欠きのある京都系土師器皿

07-ST004b出土遺物 (第4-70図)

1～3は京都系土師器の皿で、いずれも内外面にススの付着が認められる。このうち1・2は完形品に近い資料で、口縁端部には打ち欠きが認められる。

第4-70図
07-ST004b出土遺物実測図 (1/3)



第4-71図 07-ST020実測図 (1/30)

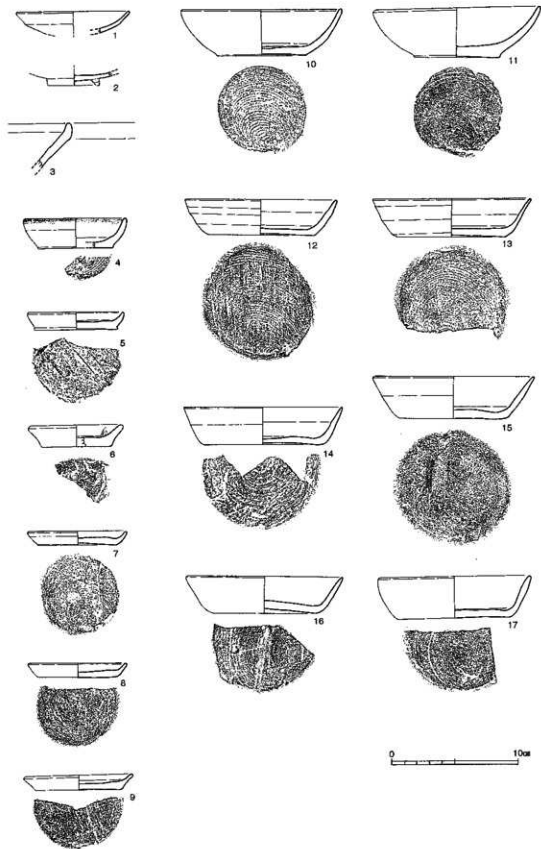
07-ST020 (第4-71図)

M65区に位置する遺構で、その規模は東西1.15m、南北1.1m、深さ1.5mである。遺構の平面形態は略長方形を呈する。埋土中位から下位にかけて、土師質土器の小皿や坏が複数出土した。また、遺物の実測図を提示していないが、鉄器片も少量出土しており、これらは鉄釘である可能性が高い。人骨などは出土しなかったが、遺構の形態や出土遺物から、当該遺構は座箱を埋設した墓坑と推定される。出土遺物から、遺構の構築時期はI期(14世紀前半)に比定される。

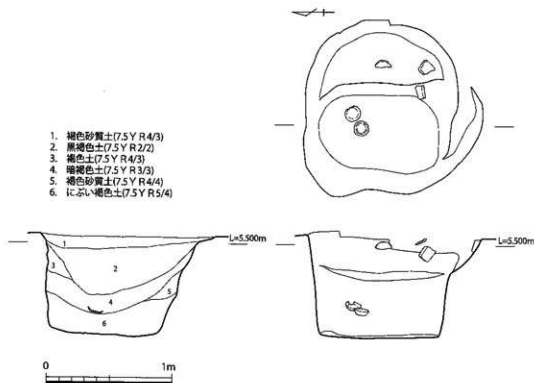
07-ST020出土遺物 (第4-72図)

1は和泉型瓦器皿の破片で、内外面にヘラミガキが施されている。小破片であることや遺物の年代が13世紀代に遡るものであり、他の遺物の年代とあわないことから、混入品であろう。2は吉備系土師器坑の底部で、14世紀前半に位置づけられる資料である。3は東播系須恵器鉢の口縁部である。4～9は土師質土器の小皿で、やや深めの器高をもつもの(4)、口縁部が外反するもの(5)、口縁部が内湾気味に立ち上がるもの(6～9)など、器形のバリエーションが認められる。底部にはいずれも右回転の糸切り痕があるが、6には板状圧痕も認められる。また、4・5にはススの付着が認められることから、灯明皿として使用されていることがわかる。10～17は土師質土器の坏である。これらの底部も右回転の糸切り痕があるが、12には板状圧痕も認められる。このうち、10・11は体部が丸みを帯びる器形を呈し、14世紀前半から中頃に比定される資料である。また、10の胎土には金雲母が少量含まれている。

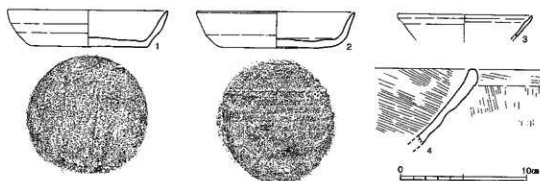
胎上に
金雲母



第4-72図 07-ST020出土遺物実測図(1/3)



第4-73図 07-ST035実測図 (1/30)



第4-74図 07-ST035出土遺物実測図 (1/3)

07-ST035 (第4-73図)

L64～L65区に位置する遺構で、その規模は東西1.35m、南北1.15m、深さ78cmである。検出当初は1基の土坑であると考えていたが、掘り下げの結果、2基の遺構が重複していることが判明した。西側の土坑の埋土中位からは、ほぼ完形の土師質土器環が2枚出土した。これらは両者とも灯明皿として使用されており、口縁部には打ち欠きがなされていた。従って、人骨などは出土しなかったが、これらの環2枚は副葬品であり、西側の土坑は墓坑である可能性が高いと判断した。墓坑の規模は0.75m、南北1.15m、深さ78cmである。当該遺構が墓坑であるとする、その大きさから、甕臥屈葬による棺が埋設されたものと推定される。出土遺物から、遺構の構築時期はⅡ期(14世紀後半)に比定される。

土師質土器
環の出土
状況から、
墓坑と判断

07-ST035出土遺物 (第4-74図)

1・2は土師質土器の環で、いずれの資料も口縁部に打ち欠きがあり、底部には糸切り痕と板状圧痕が認められる。3は中国産の白磁碗で、口縁部内面が露胎(口刺け)となる。4は瓦質土器

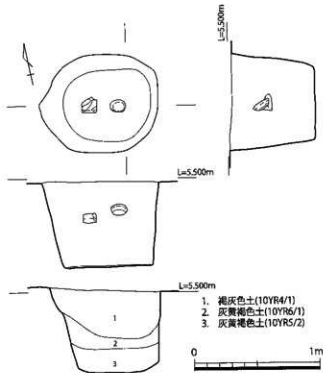
鉢の口縁部で、内外面に刷毛状工具による調整痕が認められる。なお、それぞれの遺物は、出土位置から1・2が墓坑の副葬品で、3・4が墓坑と切り合い関係にある東側の土坑に帰属するものと判断される。

07-ST045 (第4-75図)

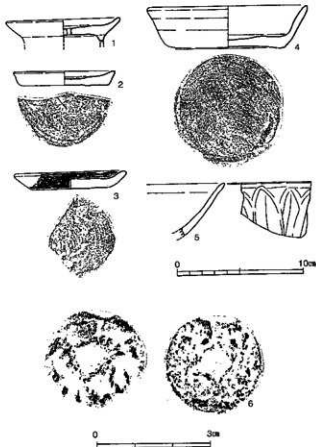
N65区に位置する遺構で、その規模は東西0.95m、南北0.8m、深さ68cmである。遺構の平面形態は略楕円形を呈する。埋土上位から中位で土師質土器の坏や拳大の碟が出土したほか、埋土中から陶磁器や土器片、銅銭が出土した。師質土器坏がほぼ完形状態で出土していることが注目される。埋土は3層に分層されるが、特記する事象はない。遺構の規模がやや小型であり、その性格を解釈するのは難しいものの、坏や銅銭が出土しているのを重視して、当該遺構を墓坑と判断した。出土遺物から、遺構の構築時期はⅡ期(14世紀後半)に比定される。

07-ST045出土遺物(第4-76図)

1は土師質土器の埴台で、脚部を有し、底部には貫通孔がある。14世紀後半に比定される資料である。2・3は土師質土器小皿で、3は内外面にススの付着が認められ、胎土には金雲母を含む。4は土師質土器坏で、埋土上位から、ほぼ完形の状態で出土した。5は中国龍泉窯系青磁碗での口縁部で、13世紀代に比定される。6は銅銭であるが、鋳出により銭文などは判読できない。



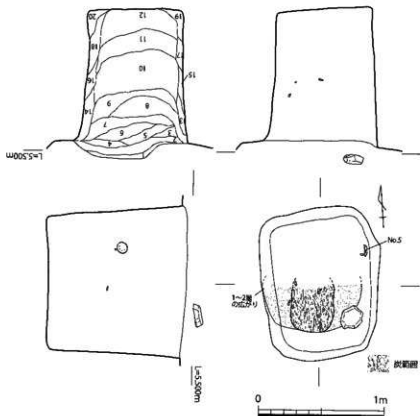
第4-75図 07-ST045実測図(1/30)



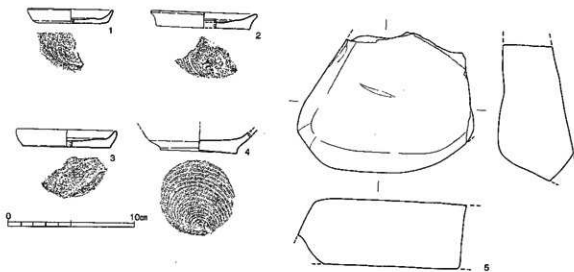
第4-76図 07-ST045出土遺物実測図(1/3、1/1)

第4章 旧万寿寺跡第7次調査

1. 灰黄褐色土(10YR5/2)
2. にぶい黄褐色土(10YR7/2)
3. 褐灰色土(10YR4/1)
4. にぶい黄褐色土(10YR7/4)
5. 灰黄褐色土(10YR6/2)
6. にぶい黄褐色土(10YR6/4)
7. にぶい黄褐色土(10YR5/4)
8. にぶい黄褐色土(10YR5/3)
9. にぶい黄褐色土(10YR4/3)
10. 灰黄褐色土(10YR4/2)
11. 暗褐色土(10YR3/3)
12. 茶褐色土(10YR3/2)
13. 灰黄褐色土(10YR5/2)
14. 灰黄褐色土(10YR5/2)
15. 灰黄褐色土(10YR4/2)
16. 灰黄褐色土(10YR4/2)
17. 灰黄褐色土(10YR5/2)
18. 灰黄褐色土(10YR5/2)
19. にぶい黄褐色土(10YR5/3)
20. にぶい黄褐色土(10YR5/3)



第4-77図 07-ST051実測図 (1/30)



第4-78図 07-ST051出土遺物実測図 (1/3)

07-ST051 (第4-77図)

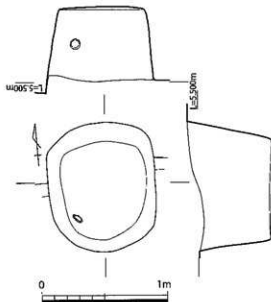
M65区に位置する遺構で、その規模は東西0.95m、南北1.2m、深さ1.1mである。遺構の平面形態は略長方形を呈する。検出面には暗褐色土の広がり(1~2層)が一定範囲で認められ、当該土層の直上には表面に加工がなされた頭大の礫が検出された。土層の観察から、暗褐色土の広がりは遺構上面を覆う盛土の一部であり、礫は標石の一部であった可能性が考えられる。また、遺構埋土については、壁際の土層の色調と性状が異なっており、これは棺の痕跡ではないかと考えた。以上の想定が妥当なものと仮定すると、当該遺構は座棺を埋設した墓坑である可能性が高い。埋土からは

盛土・
標石?

土器片が出土したが、完形になる資料は確認されていない。最も大きな遺物は埋土中位付近から出土した土師質土器坏の一部で、口縁部から胴部上半は欠損するものの、底部は残存する（第4-78図4）。出土遺物から、遺構の構築時期はⅡ期（14世紀後半）に比定される。

07-ST051出土遺物（第4-78図）

1～3は土師質土器小皿で、いずれも破片である。4は土師質土器坏で、墓坑の埋土中位から出土した遺物である。5は検出面付近から出土した礎で、表裏面と側面に加工が加えられている。



第4-79図 07-ST076実測図(1/30)

07-ST076（第4-79図）

M64～M65区に位置する遺構で、その規模は東西0.85m、南北1.0m、深さ70cmである。周辺の土坑SK010・SK053などと切り合い関係を有し、すべての遺構に切られている。埋土については3層に分層されるが、特記する事象はない。埋土中位から土師質土器の小皿が出土している。遺構の規模が小さいことや埋土の状況からは、遺構の性格を推定するのは難しいものの、遺物の出土状態などから、当該遺構も墓坑である可能性を重視しておきたい。出土遺物から、遺構の年代はⅡ期（14世紀後半）に比定される。

07-ST076出土遺物（第4-80図）

図示した遺物は土師質土器小皿で、14世紀代の製品である。



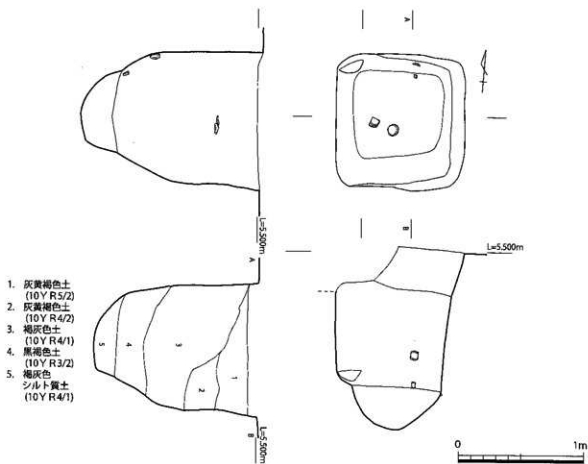
第4-80図 07-ST076出土遺物実測図(1/3)

07-ST078（第4-81図）

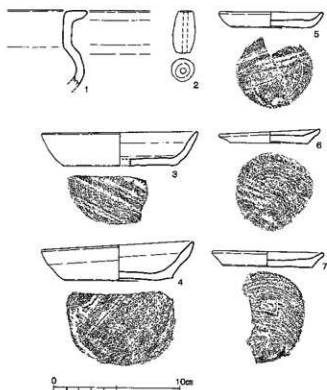
M65区に位置する遺構で、その規模は東西1.02m、南北1.1mである。遺構の平面形態は略方形を呈し、14世紀末から15世紀前半の溝ST288や15世紀中頃から後半の廃棄土坑SK056などに切られている。埋土は5層に分層され、その上位から土師質土器の坏が出土した。また、埋土中位で、遺構北側の壁際付近からも土師質土器の小皿が出土した。さらに、出土位置を特定できなかったが、埋土中から青磁の香炉の破片も出土している。また、管状土鍾も出土したが、これについては混入品であろう。人骨などは出土しなかったが、当該遺構は座棺を埋設した墓坑である可能性が高い。出土遺物と切り合い関係から、遺構の年代はⅡ期（14世紀後半）に比定される。

07-ST078出土遺物（第4-82図）

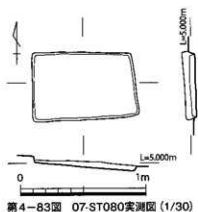
1は中国龍泉窯系青磁香炉で、口縁部から胴部にかけての破片である。14世紀代の製品か。2は管状土鍾で、墓からの出土品としては違和感があるため、混入品である可能性が高い。3・4は土師質土器の坏、5～7は土師質土器の小皿である。なお、6は遺構北側の壁際付近から出土した遺物である。



第4-81図 07-ST078実測図 (1/30)



第4-82図 07-ST078出土遺物実測図 (1/3)



第4-83図 07-ST080実測図 (1/30)

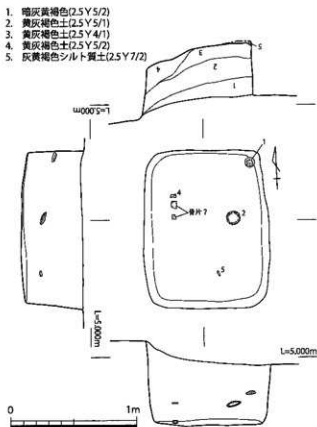
07-ST080 (第4-83図)

N65区に位置する遺構で、その規模は東西0.82m、南北5.4m、深さ0.25mである。調査以前に攪乱を受けていた部分に位置しているため、遺構の状況は不良で、その底面が僅かに残存していたに過ぎない。遺構の平面形態は略長方形を呈する。埋土は単一の1層で、出土遺物も認められない。遺構の性格を判断する材料はないが、周辺の状況から、当該遺構も墓坑と推定される。出土遺物がないうえ、遺構の構築時期は不明であるが、これも周辺の状況から、遺構の時期をⅠ・Ⅱ期(14世紀前半～後半)に比定しておきたい。

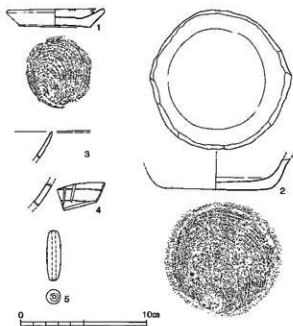
07-ST081 (第4-84図)

N65区に位置する遺構で、その規模は東西1.0m、南北1.26m、深さ0.47mである。調査以前に攪乱を受けていた地点に位置しているが、遺構は一定の深さを保持して残存していた。遺構の平面形態は略長方形を呈する。埋土は5層に分割され、埋土の下位からは骨片(?)の可能性のある物質も存在した。また、埋土の中心で、遺構の中央東寄りて土師質土器坏、北東隅近から小皿が出土した。小皿は灯明皿として使用されており、坏については胴部中心で加工がなされ、当該部位を口縁部として再生した製品であった。坏や小皿については、副葬品と考えられる。また、管状土鍾も出

骨片(?)



第4-84図 07-ST081実測図 (1/30)



第4-85図 07-ST081出土遺物実測図 (1/3)

た。小皿は灯明皿として使用されており、坏については胴部中心で加工がなされ、当該部位を口縁部として再生した製品であった。坏や小皿については、副葬品と考えられる。また、管状土鍾も出

土したが、これについて副葬品としては考えにくいので混入品であろう。遺構や遺物の様相から、当該遺構は朝臥屈葬による棺が埋設された墓坑と推定される。出土遺物から、遺構の構築年代はⅡ期（14世紀後半）に比定される。

07-ST081出土遺物（第4-85図）

口縁部を
再生した杯

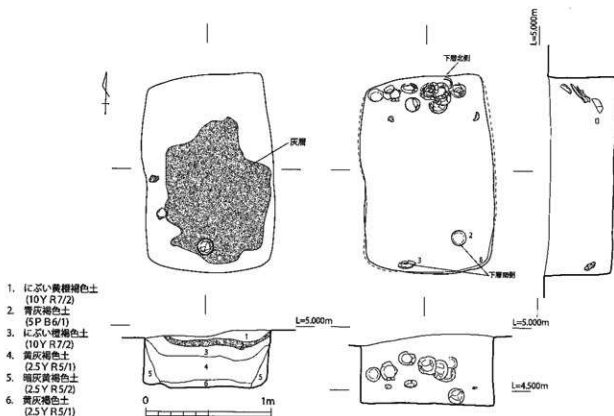
1は遺構の北東隅付近から出土した土師質土器小皿。口縁部部にススの付着が認められ、灯明皿として使用された資料である。2は土師質土器杯で、胴部中位で加工がなされ、当該部位を口縁部として再生した製品である。3は陶器の破片で、瀬戸美濃系の製品か。4は中国龍泉系青磁碗の胴部で、外面に蓮弁文が認められる。5は管状土錘である。3～5については、混入品であろう。

07-ST082（第4-86図）

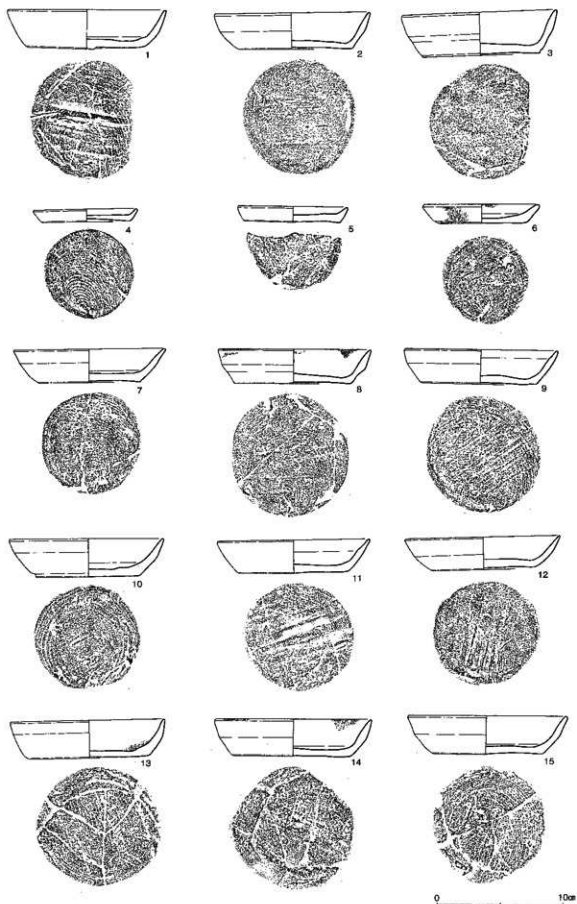
灰の堆積
土器の
出土状態

N65区に位置する遺構で、その規模は東西1.04m、南北1.56m、深さ0.53mである。調査以前に擾乱を受けていた地点に位置しているが、遺構は一定の深さを保持して残存していた。遺構の平面形態は略長方形を呈する。

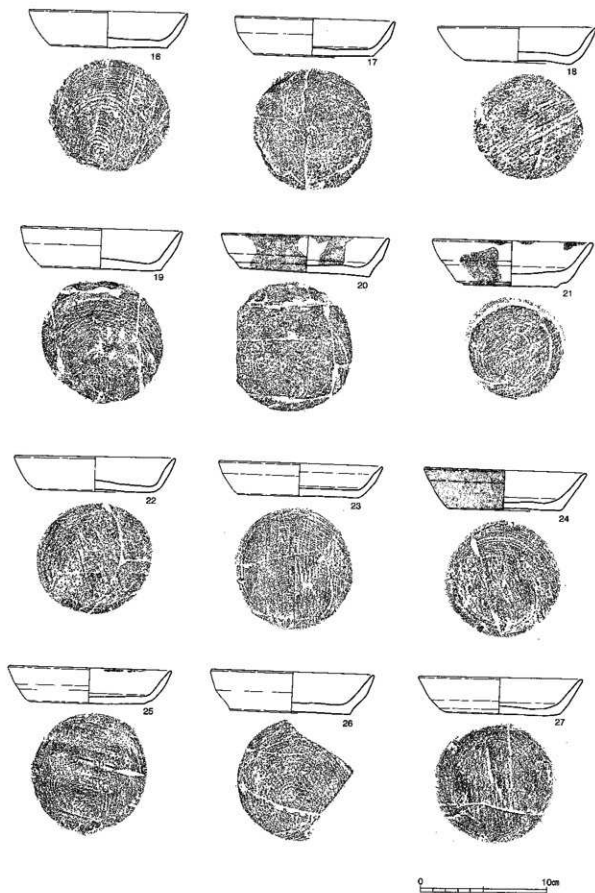
埋土上位には東西0.8m、南北0.8m、厚さ約3cmの範囲で灰が堆積しており、それより上位で土師質土器が複数出土している。土器の中にはほぼ完形となる土師質土器杯も認められた。また、灰層より下位の遺構北壁付近で土師質土器の小皿や杯が30個体以上、南壁付近で杯が2個体以上出土した。北壁付近で出土した土器類は、壁から底面に向かって斜め方向に貼り付くような状態で出土している。杯の中にはススが付着するものあり、さらに胴部中位で加工がなされ、当該部位を口縁部として再生した製品もある。南側の壁付近から出土した土器は少量ではあるが、杯が2個体認められ、ひとつはほぼ正位で、もうひとつは遺構の底面側に傾いた状態で出土した。



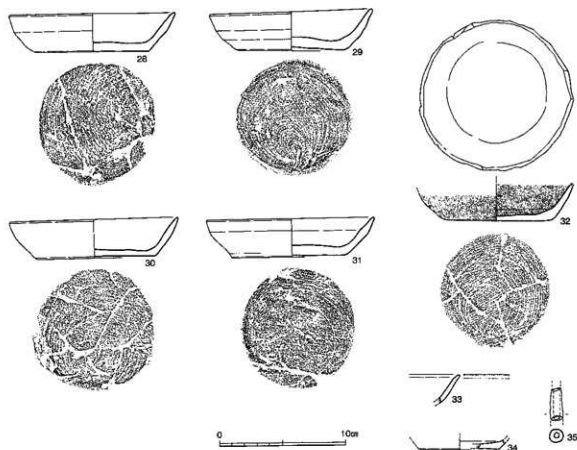
第4-86図 07-ST082実測図(1/30)



第4-87図 07-ST082出土遺物実測図①(1/3)



第4-88図 07-ST082出土遺物実測図② (1/3)



第4-89図 07-ST082出土遺物実測図③ (1/3)

以上のような状況から、人骨などは出土していないものの、当該遺構は側臥埋葬による棺が埋設された墓坑と推定される。灰層より下位で出土した土器類は、埋葬が行われた当初には棺の蓋上に置かれていたが、棺の腐朽によって、壁に沿って傾いたような状況になったと推定される。また、棺を埋める時に、埋土に灰が投入され、同時に土器を使用した祭祀行為も行われたことがわかる。出土遺物から、遺構の構築年代はⅡ期（14世紀後半）に比定される。

07-ST082出土遺物（第4-87図～第4-89図）

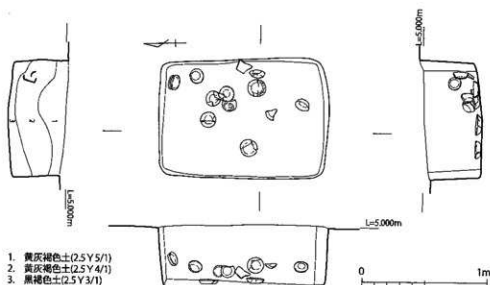
1は土師質土器坏で、灰層より上位で出土した土器類のひとつである。当該資料はほぼ完形の状態で出土した。底部には糸切り痕とともに板状圧痕が明瞭に残っている。

2～35は灰層より下位で出土したもので、2～3は遺構の南壁付近、4～35は遺構の北壁付近の出土である。

南壁付近で出土した2・3はいずれも糸切り痕のある土師質土器坏で、2の底部外面には板状圧痕が認められ、3の底部外面にはナデが施されている。

北壁付近で出土した遺物のうち、3～6は土師質土器小皿、6～32は土師質土器坏である。小皿・坏ともに、口縁部にススの付着が認められる資料があり、これらは灯明皿として使用されたものであろう。また、32には内外面にススが付着しており、さらに胴部中位で加工がなされ、当該部位を口縁部として再生している。33・34は中国産の口割れ白磁碗の口縁部と底部、35は管状土師の破片である。33～35は、いずれも小破片であるため、混入品と思われる。

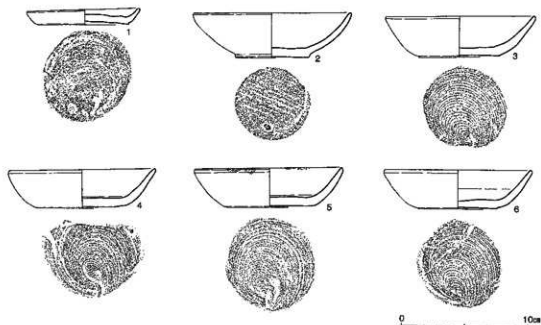
口縁部を
再生した坏



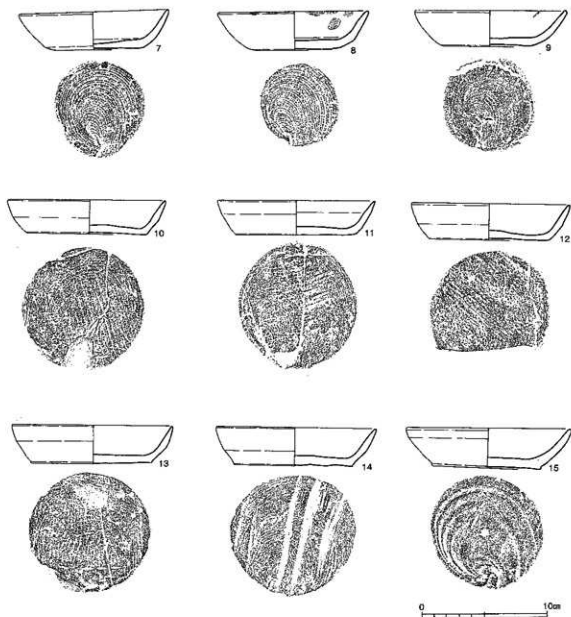
第4-90図 07-ST083実測図 (1/30)

07-ST083 (第4-90図)

N65区に位置する遺構で、その規模は東西0.94m、南北1.35m、深さ0.48mである。調査以前に擾乱を受けていた地点に位置しているが、遺構は一定の深さを保持して残存していた。遺構の平面形態は略長方形を呈する。埋土中から土師質土器が16個体以上出土した。遺物は壁際から底面に向かって傾いたような状態で出土している。また、埋土中から、甕と思われる青銅製品が出土している。以上のような状況から、人骨などは出土していないものの、当該遺構は倒臥埋葬による棺が埋設された墓坑と推定される。土器類は棺の臺上に置かれた副葬品と推定されるが、甕については副葬品なのか、混入品なのかを判断するのが難しい。出土遺物から、遺構の構築年代はI期（14世紀前半）に比定される。



第4-91図 07-ST083出土遺物実測図① (1/3)



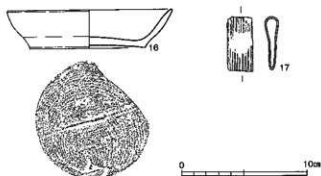
第4-92図 07-ST083出土遺物実測図② (1/3)

07-ST083出土遺物

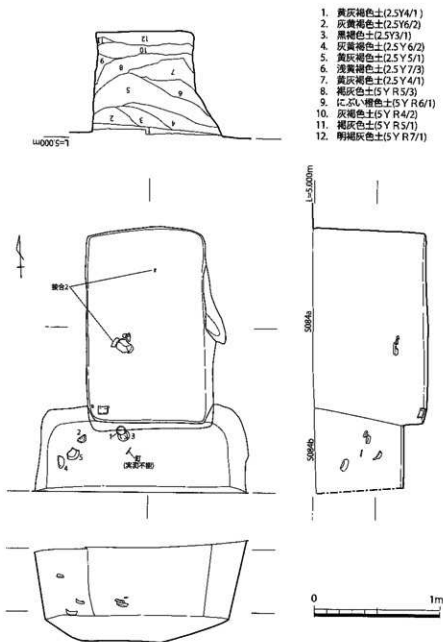
(第4-91図～第4-93図)

1は土師質土器小皿、2～16は土師質土器坏である。このうち、2は丸味を帯びた体部を有するもので、14世紀前半に比定される資料である。また、2～7・9の胎土には金雲母を含む。17は青銅製の鐘で、外面に製作時に生じた縦方向の筋が認められる。

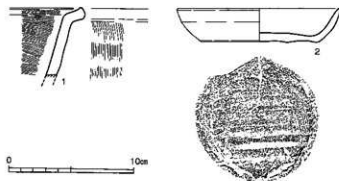
金雲母



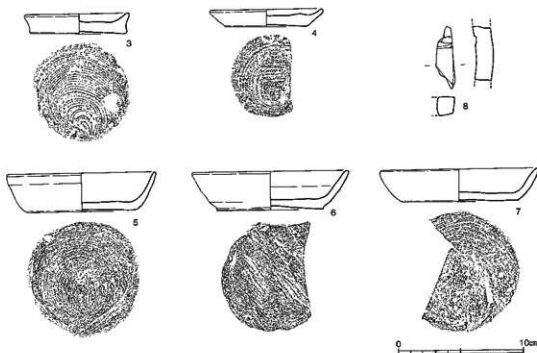
第4-93図 07-ST083出土遺物実測図③ (1/3)



第4-94図 07-ST084a・07-ST084b実測図(1/30)



第4-95図 07-ST084a出土遺物実測図(1/3)



第4-96図 07-ST084b出土遺物実測図(1/3)

07-ST084a・07-ST084b (第4-94図)

切り合い関係にある2基の遺構で、N65～N6区に位置する。遺構の構築順序はST084b→ST084aで、ST084aが新しく、ST084bが古い。調査以前に擾乱を受けていた地点に位置しているが、遺構は一定の深さを保持して残存していた。遺構の規模はST084aが東西1.0m、南北1.6m、深さ0.93m、ST084bが東西1.6m、南北0.64m、深さ0.71mである。ST084bの南側は調査区外に伸びるため、未調査となる。

ST084aの埋土下位からは、土師質土器杯1個体が出土した。当該遺物は遺構のほぼ中央南西寄りに割れた破片がままとっていたが、その北東約0.6m離れた地点から出土した小破片が接合している。また、底面近くの南西隅から土鍋の口縁部が出土したが、これについては破片であるため、混入品であろう。

ST084bの埋土中位付近からは、土師質土器や滑石製品の破片が出土した。また、冏化不能の鉄製品が1点出土しているが、これについては鉄釘である可能性がある。

以上のような状況から、人骨などは出土していないものの、当該遺構は両者とも側臥屈葬による棺が埋設された墓坑と推定される。出土遺物のうち、土器類については棺上に置かれていた副葬品である可能性が高いと推定される。遺構は切り合い関係にあるが、ST084a・T084bの出土遺物に明瞭な年代差は認められない。出土遺物から、ST084a・T084bとも遺構の年代はII期(14世紀後半)に比定される。

07-ST084a・07-ST084b出土遺物(第4-95図・第4-96図)

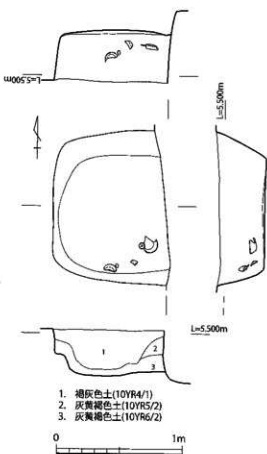
1・2はST084aの出土遺物である。1は土鍋の口縁部、2は土師質土器杯で、いずれも14世紀代の製品である。

3～8はST084bの出土遺物である。3・4は土師質土器小皿で、4の胎土には金雲母が認められる。5～7は土師土器杯である。8は加工が加えられた滑石製品の破片で、石鍋の再加工作品である可能性が高い。

金雲母

07-ST092 (第4-97図)

M65区に位置する遺構で、その規模は東西0.89m、南北1.2m、深さ0.35mである。平面形態は略長方形を呈し、遺構の東側を14世紀末から15世紀前半の溝SD288の構築によって切られている。埋土は3層に分層されるが、切り合いによって遺構の東側が破壊されているため、特記する事象は認められない。埋土の下部からは、土師質土器坯と銅銭が出土した。土器類はすべて破片で、完形に復元できる資料はない。土器の中には口縁部が外反するなど、やや新しい様相を持つものも存在しており、溝SD288の構築によって遺構の一部が破壊されるまでの時間幅、すなわち遺構の存続時期は比較的短かったことが想定される。遺構の性格については、それを判断する材料に乏しいが、掘形の形態や周辺の状況から、当該遺構についても墓坑と解釈しておきたい。出土遺物や切り合い関係から、遺構の年代はⅡ期(14世紀後半)に比定される。



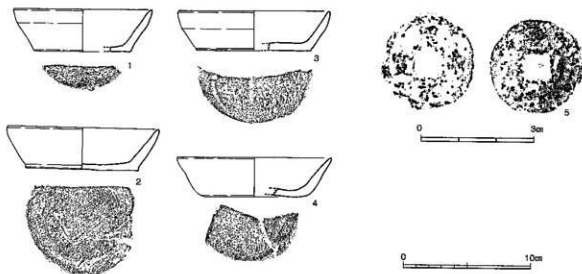
1. 褐色土(10YR4/1)
2. 灰黄褐色土(10YR5/2)
3. 灰黄褐色土(10YR6/2)

第4-97図 07-ST092実測図(1/30)

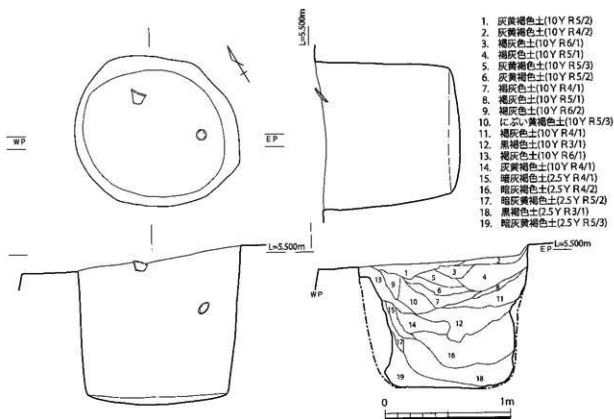
遺構の
存続時期
は短い？

07-ST092出土遺物 (第4-98図)

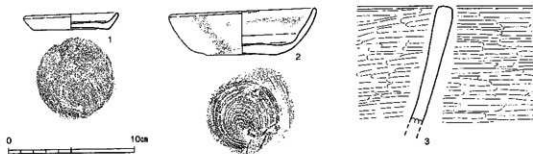
1~4は土師質土器の坯である。底部はいずれも糸切り底で、一部にナデが施されている。このうち、4は口縁部が外反することから、やや新しい要素を有する個体と思われる。5は銅銭であるが、「寶」字が判読できるものの、鋳出のため銭文などは不明である。



第4-98図 07-ST092出土遺物実測図(1/3、1/1)



第4-99図 07-ST108実測図 (1/30)



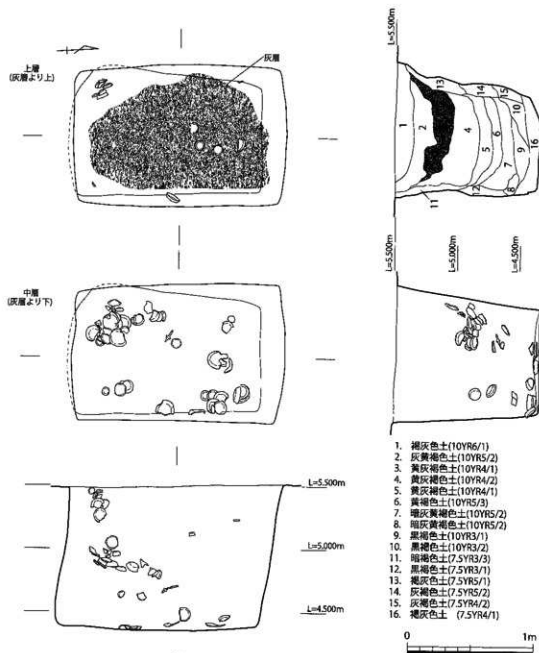
第4-100図 07-ST108出土遺物実測図 (1/3)

07-ST108 (第4-99図)

O65区に位置する遺構で、その規模は東西1.26m、南北1.3m、深さ1.06mである。遺構の平面形態は略円形を呈する。遺構の検出面付近から土師質土器坏、埴土上位から土師質土器小皿が出土している。土師質土器小皿は完形品である。遺構の性格を判断する材料に乏しいが、その形態や周辺の状況から、当該遺構は座箱を埋設した墓坑と解釈しておきたい。出土遺物から、遺構の年代はⅡ期(14世紀後半)に比定される。

07-ST108出土遺物 (第4-100図)

1は土師質土器の小皿で、底部は糸切り底となる。2は土師質土器の坏で、体部の内外面にススの付着が認められる。3は瓦質土器鉢の口縁部で、内外面にミガキ調整が施されている。1～3はいずれも14世紀代の製品である。



第4-101図 07-ST110実測図 (1/30)

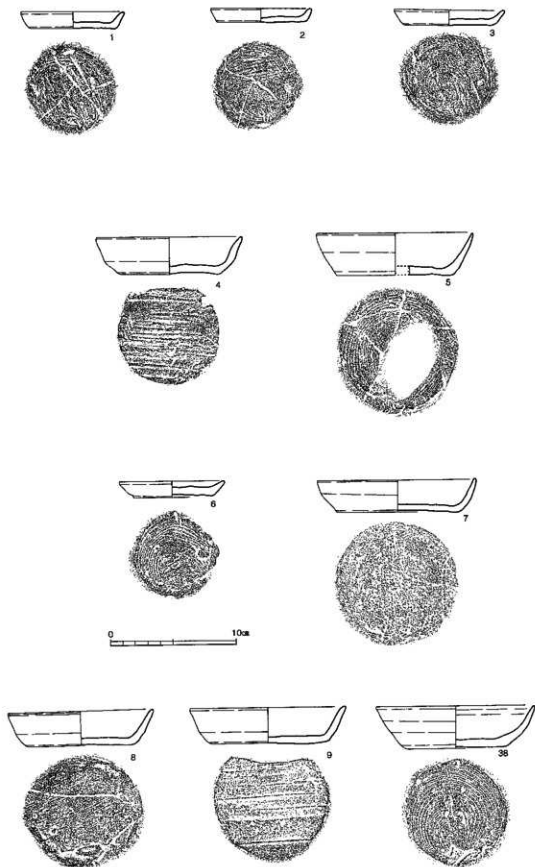
07-ST110 (第4-101図)

O65区に位置する遺構で、その規模は東西1.06m、南北1.72m、深さ1.14mである。調査以前に擾乱を受けていた地点に位置しているが、遺構は一定の深さを保持して残存していた。遺構の平面形態は略長方形を呈する。

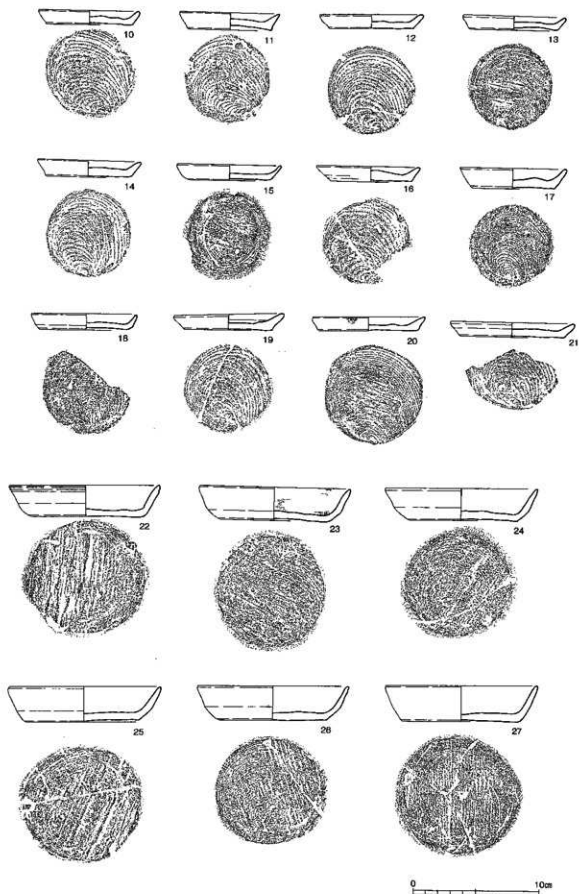
灰の堆積
土器の
出土状態

埋土上位には東西0.9m、南北1.4m、厚さ約12cmの範囲で灰が堆積しており、それよりさらに上位で土師質土器の小皿や坏が数点出土した。また、遺構の南西で、壁面にへばり付くような状態で、小皿や坏がまとまって出土している。この土器類のまとまりには、少なくとも小皿1個体・坏4個体があり、口縁部の一部を欠くだけの完形に近い個体なども存在したが、完成品は認められない。

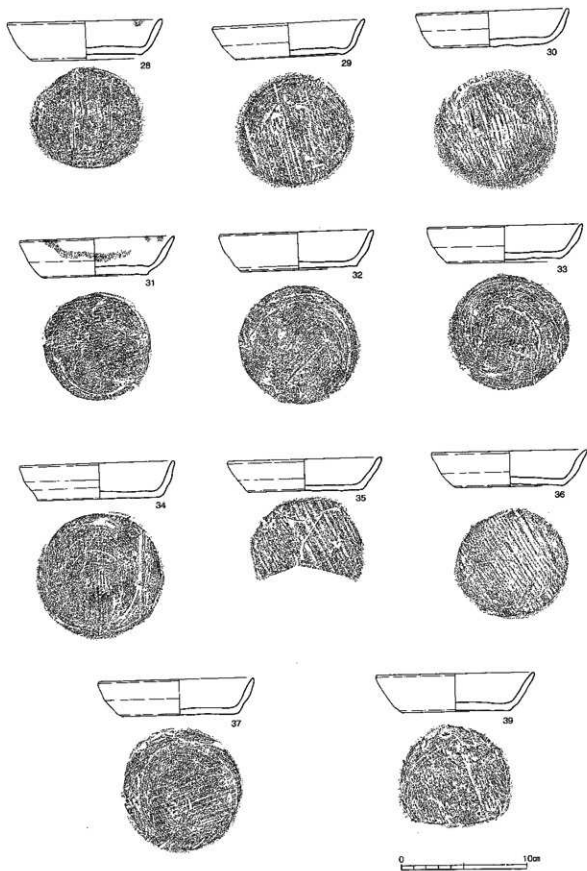
埋土中位から底面近くにかけても40個体を越す土師質土器の小皿や坏が出土し、灯明型として使用されたものや胴部中位付近に加工を施し、口縁部を再生した資料などもある。埋土中位付近で出



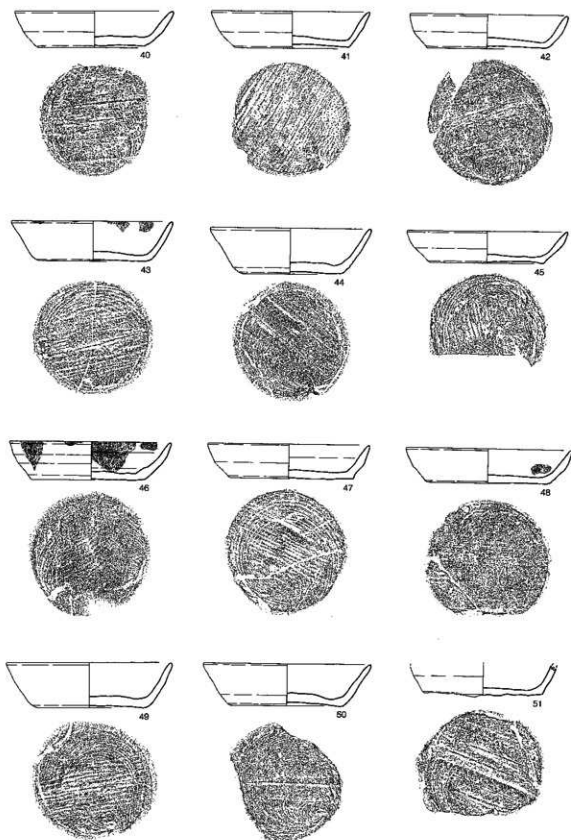
第4-102図 07-ST110出土遺物実測図①(1/3)



第4-103図 07-ST110出土遺物実測図②(1/3)



第4-104図 07-ST110出土遺物実測図③ (1/3)



第4-105図 07-ST110出土遺物実測図③ (1/3)

土した土器類については、壁から底面に向かって流れ込むような出土状態を呈するものも認められた。また、土器類以外の出土遺物としては、鉄製の燭台や砥石などがある。砥石については破片であることから、混入品である可能性もある。

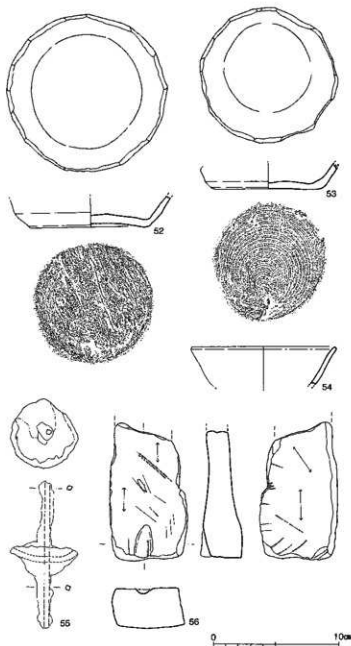
燭台・砥石の出土

土層の変化による積層の痕跡

なお、遺構の強土については、掘形壁際の土層の色調と性状が異なっており、これは棺の痕跡ではないかと考えた。

以上のような状況から、人骨などは出土していないものの、当該遺構は側臥屈葬による棺が埋設された墓坑と推定される。掘土中位より下で出土した遺物については、埋葬が行われた当初には棺の蓋の上に置かれていたが、棺の腐朽によって流れ込んだような出土状態になったと推定される。また、棺を埋める際に埋土に灰が投入され、同時に土器を使用した祭祀行為も行われたことがわかる。同様な埋土の状況や遺物の出土状態を呈する遺構としては、ST082がある。出土遺物から、遺構の構築年代はⅡ期（14世紀後半）に比定される。

ST082と類似



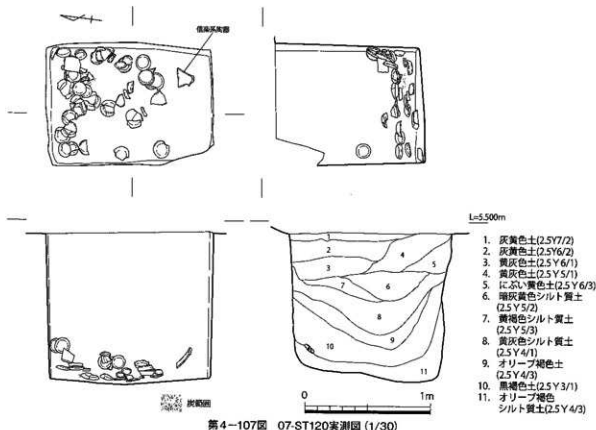
第4-106図 07-ST110出土遺物実測図⑤(1/3)

07-ST110出土遺物（第4-102図～第4-106図）

1～9は灰層より上位で出土した遺物で、特に6～9は遺構の南西隅からまともな出土した資料である。いずれも土師質土器の小皿または杯で、すべての資料が右回転の糸切り底となるが、これに加えて板状圧痕が認められるものが多い。

10～56は灰層より下位で出土した遺物である。10～21は土師土器小皿で、口縁端部にススの付着が認められることから、灯明皿として使用されたものがある。22～50は土師質土器の杯で、これらの中にも灯明皿として使用されたものが認められる。また、51～53は胴部中位付近で加工を加え、口縁部を再生している資料である。54は中国産の白磁碗で、口縁内面端部が口剥げとなる。小破片であるため、混入品であろう。55は鉄製の燭台、56は砂岩を素材とする砥石である。

口縁部を再生した杯



07-ST120 (第4-107図)

N65～O65区に位置する遺構で、その規模は東西0.97m、南北1.33m、深さ1.18mである。遺構の平面形態は略長方形を呈する。

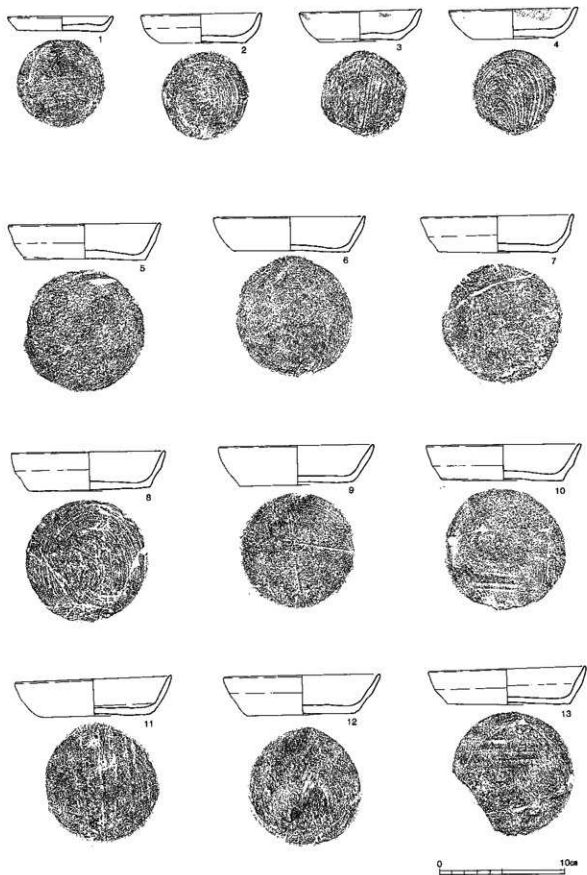
遺構埋土については、上位に地山のブロック土（黄褐色土）を斑状に含む土層群が堆積し、下位には炭化物を少量含む暗褐色系の土層群が堆積するが、肉眼で観察可能な灰層などは確認できなかった。埋土下位からは土師質土器の小皿や坏が30個体以上出土したほか、信楽系陶器鉢や瓦なども出土した。遺物はいずれも底面からは浮いており、遺構床面から出土したものは認められない。また、土器類の中には壁際から底面に向かって傾斜しているような出土状態を呈するものも認められる。信楽系陶器鉢や瓦については、一定の大きさの破片ではあるが、副葬品としては違和感があるため、埋土中に混入した遺物と考えておきたい。

以上のような状況から、人骨などは出土していないものの、当該遺構は個別屈葬による棺が埋設された墓坑と推定される。土器類については、漂葬が行われた当初には棺の蓋上に置かれていたが、棺の腐朽によって流れ込んだような状態になったと推定される。出土遺物から、遺構の構築年代はⅡ期（14世紀後半）に比定される。

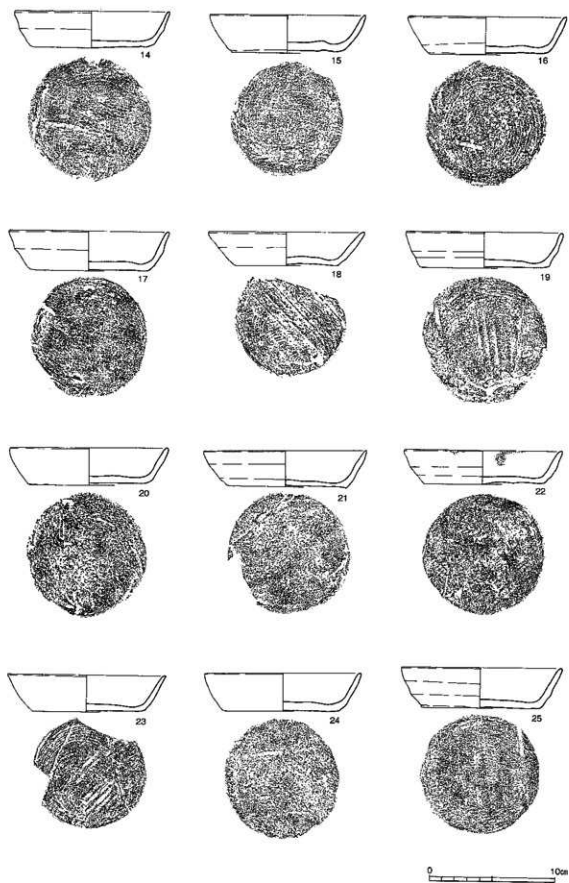
07-ST120出土遺物 (第4-108図～第4-110図)

1～4は土師質土器小皿である。このうち、2～4については口縁部が内湾気味に立ち上がる器形を呈し、胎土に金雲母を含むことから、豊後府内以外の地で製作された製品と思われる。3と4は灯明皿として使用されている。5～32は土師質土器の坏で、口縁端部にスガが付着するものは、灯明皿として使用されている。33は信楽系陶器鉢で、13～14世紀代の製品である。

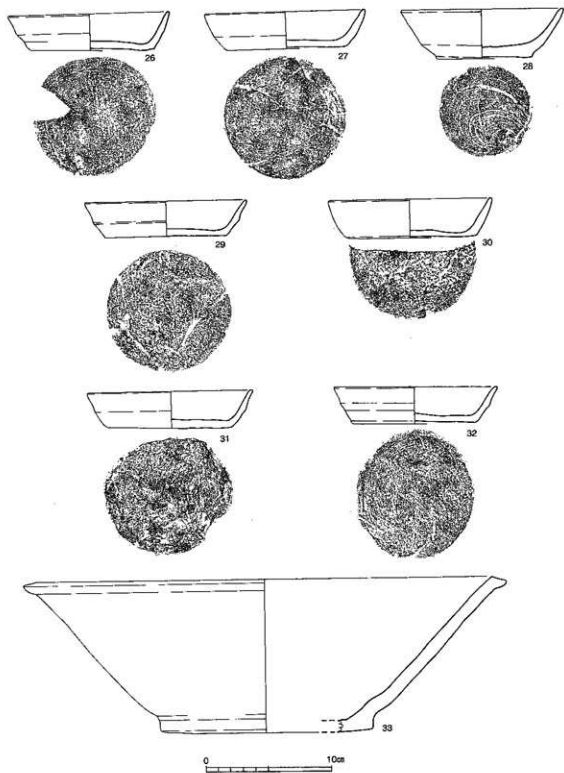
金雲母
信楽系陶器
鉢



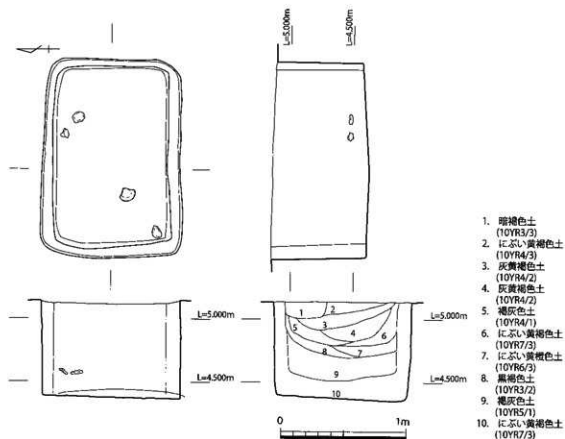
第4-108図 07-ST120出土遺物実測図①(1/3)



第4-109図 07-ST120出土遺物実測図② (1/3)

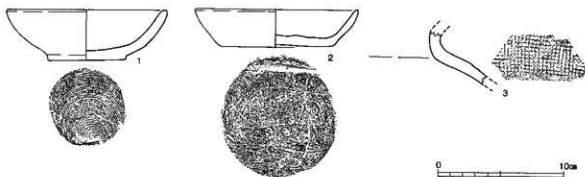


第4-110図 07-ST120出土遺物実測図③ (1/3)



1. 暗褐色土 (10YR3/3)
2. にぶい黄褐色土 (10YR4/3)
3. 灰黄褐色土 (10YR4/2)
4. 灰黄褐色土 (10YR4/2)
5. 褐灰色土 (10YR4/1)
6. にぶい黄褐色土 (10YR7/3)
7. にぶい黄褐色土 (10YR6/3)
8. 黒褐色土 (10YR3/2)
9. 褐灰色土 (10YR5/1)
10. にぶい黄褐色土 (10YR7/3)

第4-111図 07-ST125実測図 (1/30)



第4-112図 07-ST125出土遺物実測図 (1/3)

07-ST125 (第4-111図)

N65～O65区に位置する遺構で、その規模は東西1.57m、南北1.1m、深さ0.77mである。調査以前に受けた擾乱によって、遺構の西辺の一部をわずかに破壊されていた。遺構の平面形態は略長方形を呈する。遺構の壁面から幅10cm強の範囲は、埋土の色調や性状が異なっており、これは棺の痕跡であった可能性が考えられる。遺構埋土については、上位に色調がやや明るい黄褐色系の土層群が堆積し、下位には炭化物を少量含む暗褐色系の土層群が堆積するが、肉眼で観察可能な灰層などは確認できなかった。埋土の下位からは土師質土器の坏や小皿、東播磨系須恵器の破片などが少量出土したが、完形となる資料は認められない。以上のような状況から、人骨などは出土していないものの、当該遺構は朝臥屈葬による棺が埋設された墓坑と推定される。出土遺物から、遺構の構築年代はI期(14世紀前半)に比定される。

棺の痕跡

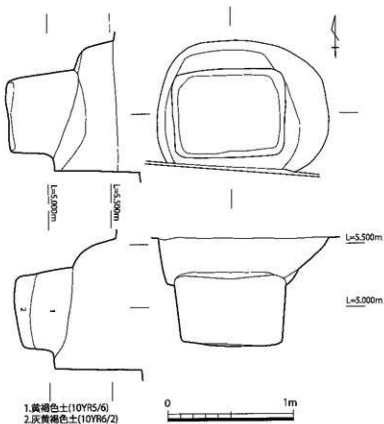
07-ST125出土遺物 (第4-112図)

1・2は土師質土器の坏で、このうち1は丸味を帯びた体部をもつことから、14世紀前半に比定される資料である。3は東播系須恵器の甕で、肩部外面に格子目叩きが施されている。小破片であるため、混入品であろう。

07-ST126

(第4-113図)

N65区に位置する遺構である。調査当初は上面が略楕円形プランを有する土坑であると考えていたが、掘り下げを進めていくと、その下に略長方形を呈する土坑状の掘り込みを有する遺構であることが判明した。検出面の楕円形プランの規模は東西1.35m、南北1.03m、深さ0.85m、略長方形を呈する掘り込みの規模は東西0.89m、南北0.7m、深さ0.6mである。略長方形の掘り込み部分の埋土は2層に分層されるが、特記する事象は認められない。埋土からは土器片等が少量出土したが、図化可能な遺物は存在しない。遺構の性格を判断する材料に乏しいが、掘り込みの形態や周辺の状況から、当該遺構も側臥屈葬による棺が埋設された墓坑と推定しておきたい。良好な出土遺物がなため、遺構の構築年代も不明であるが、これについても周辺の遺構の状況から、Ⅰ・Ⅱ期(14世紀前半～後半)と考えておきたい。



第4-113図 07-ST126実測図 (1/30)

が、図化可能な遺物は存在しない。遺構の性格を判断する材料に乏しいが、掘り込みの形態や周辺の状況から、当該遺構も側臥屈葬による棺が埋設された墓坑と推定しておきたい。良好な出土遺物がなため、遺構の構築年代も不明であるが、これについても周辺の遺構の状況から、Ⅰ・Ⅱ期(14世紀前半～後半)と考えておきたい。

07-ST130

N65区に位置する遺構の痕跡である。調査以前に攪乱を受けていた地点に位置しており、掘り込みなどは残存していない。発掘調査時には気づかなかったが、調査終盤近くに撮影した空中写真を分析すると、東西約0.8m、南北約1.2mの範囲が周辺の土壌と色調が異なる部分があることを確認した。従って、当該地点にも側臥屈葬による棺が埋設された墓坑が存在しており、近年の攪乱を受けた際に、遺構が完全に消失したものと考えられる。以上のような状況から、遺構の年代を判断することは困難であるが、本調査区で墓坑と解釈した他の遺構と同様、それをⅠ・Ⅱ期(14世紀前半～後半)に比定しておきたい。

5 その他の遺構

07-SX068 (第4-114図)

M64区に位置する土坑で、その規模は東西1.05m、南北1.08m、深さ0.15mである。調査以前に攪乱を受けていた地点に位置しているため、遺構の残存状況は不良であった。平面形態は円形プランを呈し、北側は調査区外に伸びる。遺構の堀土中からは銅銭が10枚出土した。銅銭は銕銭の状態ではなく、土坑内に1枚1枚がばらまかれたような状態であった。銅銭の他には出土遺物は認められない。遺構のその性格は明らかではない

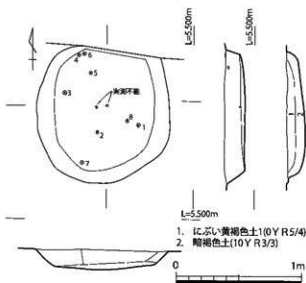
銅銭 10枚

至大通寶

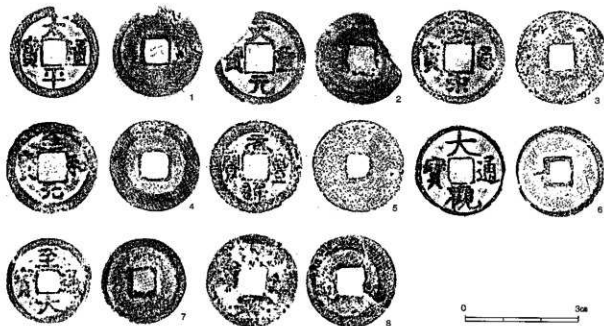
が、銅銭を使用した祭祀行為が行われたものと判断される。出土した銅銭には「至大通寶」(中国元代・1310年初鑄)を含むことから、遺構の年代はⅠ・Ⅱ期(14世紀前半～後半)に比定される。

07-SX068出土遺物 (第4-115図)

出土した銅銭10枚の中から、8枚を図示した。残りの2枚は遺存状態が悪く、図化不能である。銅銭には、太平通寶(初鑄造年976年、背右星)・天聖元寶(同1023年)・皇宋通寶(同1038年)・至大通寶(同1054年)・元豊通寶(同1078年)・大觀通寶(同1107年)・至大通寶(同1310年)および判読不明がある。銅銭の中に至大通寶を含むのが特徴³⁾である。



第4-114図 07-SX068実測図(1/30)



第4-115図 07-SX068出土遺物実測図(1/1)

註3) 至大通寶が含まれる一括出土銭(鎌倉銭)は、鈴木公雄氏による2期(14世紀第2四半期から第3四半期)に属年される。鈴木公雄『出土銭貨の研究』(東京大学出版会 1999年) 66頁

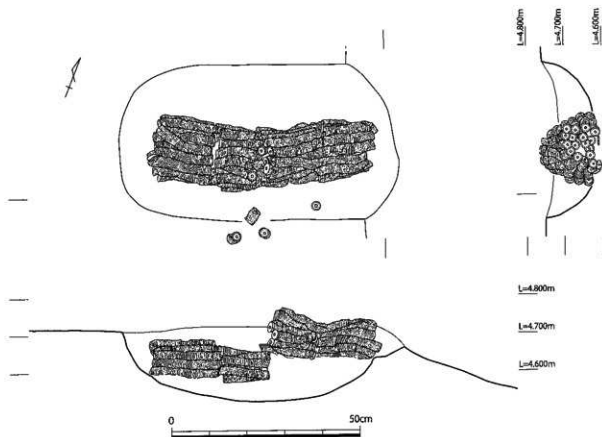
07-SX100 (第4-116図)

銅銭一括
出土遺構

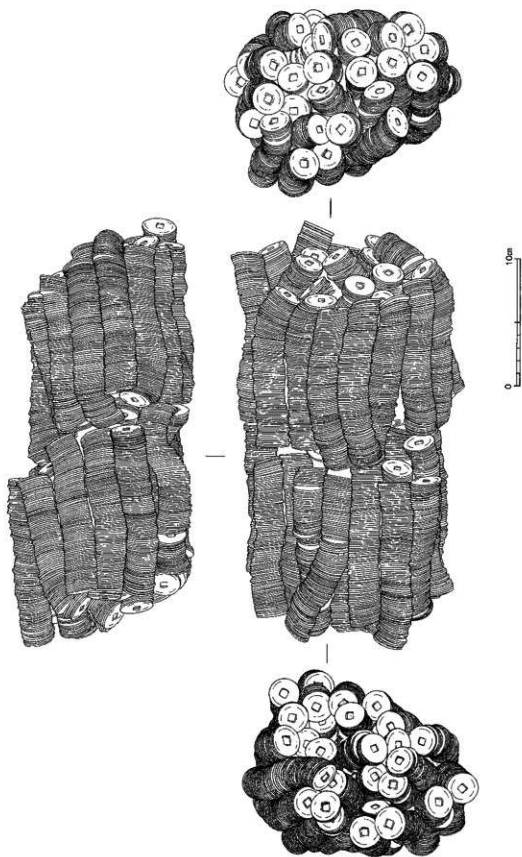
M65区に位置する遺構で、約5,000枚と推定される釋銭の錢塊2個を素掘りの土坑に埋めたものである。このため、当該遺構を「銅銭一括出土遺構」と呼称することにしたい。遺構が発見された地点の周辺には、16世紀代の整地層が部分的にはあるが、広範囲に堆積しており、SX100はこの整地層に完全に覆われていた。また、14世紀末から15世紀前半の溝SD090と切り合い関係を有し、溝の構築によって土坑掘方東側の一部が破壊されていた。土坑の平面形態は略楕円形を呈し、その規模は長さ0.74m、幅0.41m、深さ0.20mである。埋められていた錢塊のうちのひとつは土坑底面西側にほぼ正位の状態で見出されたが、いまひとつは東側がやや傾いた状態であった。これは下位の錢塊の東端上部と上位の錢塊の西端下部を重ねて埋めたために生じた現象で、掘られた土坑の大きさに影響を受けたのであろう。遺構埋土の色調や性状は周辺の土とほとんど変化が認められないことから、錢塊2個は同時に埋められ、埋土も早期に埋め戻されたと考えている。

埋土の観察や遺物の出土状態からは、銅銭が木箱等に入れられたような状況は認められなかった。また、肉眼による表面観察でも錢塊が布袋に入れられたり、ネット状の縄で縛られていた痕跡は確認できていない。しかしながら、銅銭が剥き出しの状態で見出されたという状況は想定しにくいため、錢塊の表面に腐朽してしまった何らかの物質が存在した可能性は考えられる。

なお、土坑検出面の上面から10～15cmほど上位で、数枚程度が付着した銅銭(第125図1～11)が出土している。これらの銅銭が、本来2つの錢塊の一部であったかどうかについては判断が難しいため、保留しておくことにしたい。

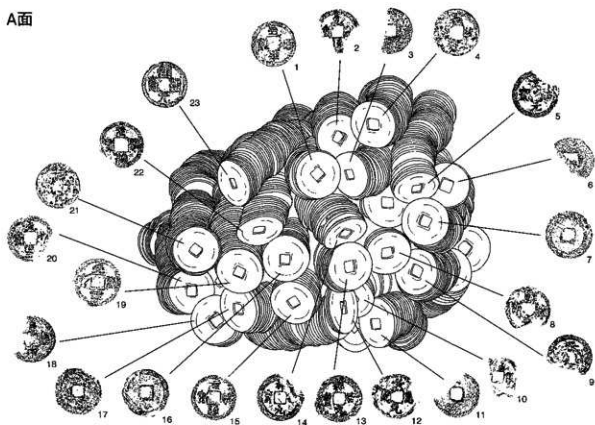


第4-116図 07-SX100実測図 (1/10)

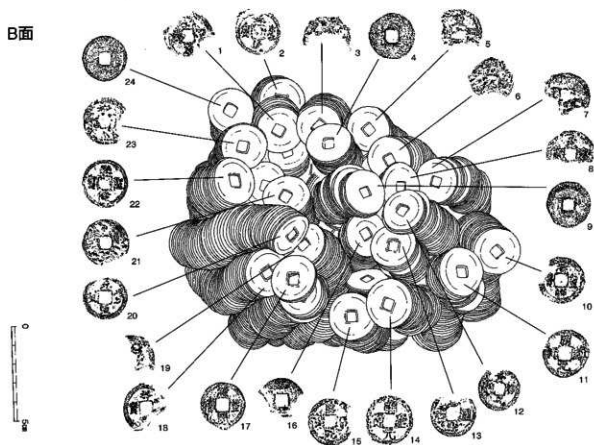


第4-117図 07-SX100出土遺物実測図①(錢塊1・1/3)

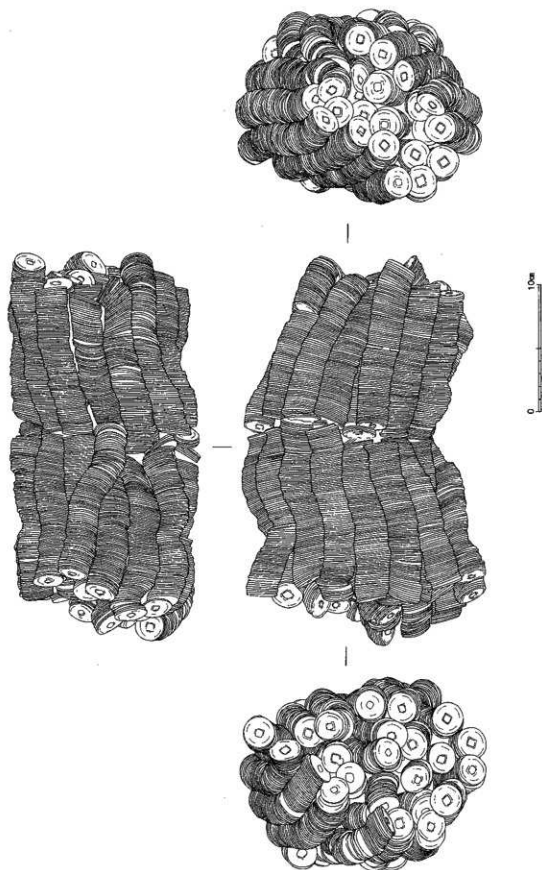
A面



B面

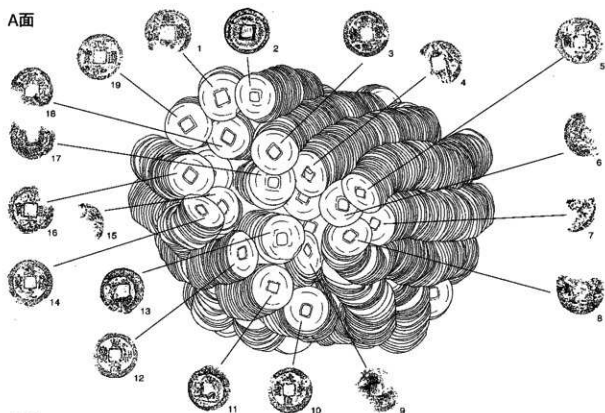


第4-118图 07-SX100出土遺物実測図②(銭塊1・1/2)

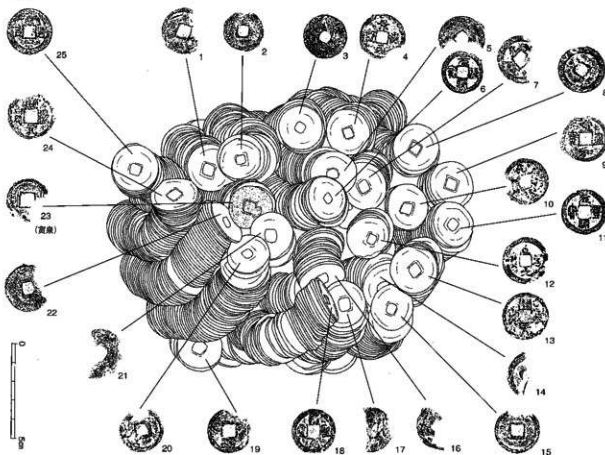


第4-119図 07-SX100出土遺物実測図③(錢塊2・1/3)

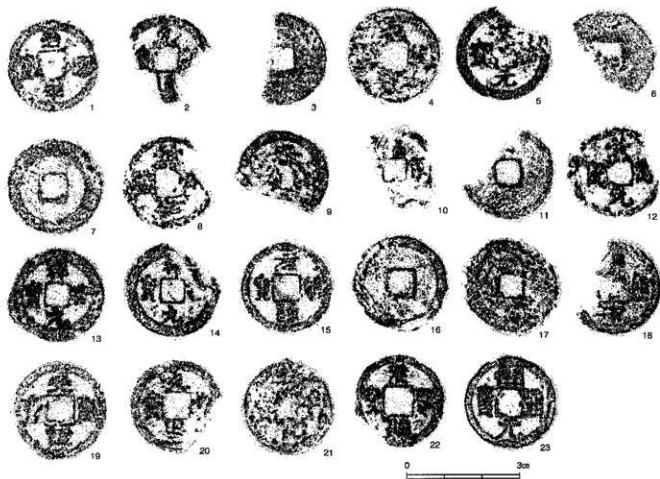
A面



B面



第4-120图 07-SX100出土遺物実測图③ (銭境2・1/2)



第4-121図 07-SX100出土遺物実測図⑤(銭塊1のA面、1/1)

土坑内部からの出土遺物は銅銭以外には認められないが、SX100が14世紀末から15世紀前半の溝SD090に切られていることから、遺構の年代はそれ以前に遡る。また、万寿寺の創建年代が徳治元年(1306)であることから、遺構の上限年代がそれ以前に遡ることも考えがたい。以上の状況から、銅銭一括出土遺構の年代は、遺構の年代はⅠ～Ⅱ期(14世紀前半～末)に比定される。

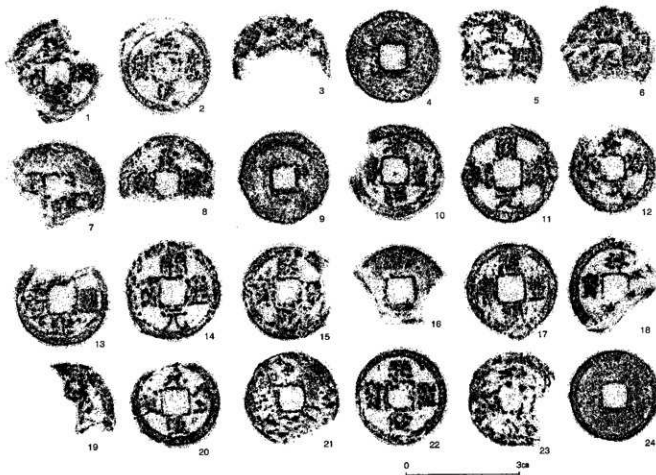
07-SX100出土遺物(第4-117図～第4-125図)

前記のとおり、07-SX100の土坑内からは、約5,000枚を一単位とした緋銭の束が2個体出土した(第4-117図～第4-123図)。土坑の下位から出土した銭の束を「銭塊1」、上位から出土した銭の束を「銭塊2」として、以下の記述を進めたい。

なお、約5,000枚を一単位とした緋銭の束は、その形態や規格が広島県草戸千軒町遺跡第28次調査SD978出土の5貫文(約5,000枚)の出土資料と類似していると判断された。草戸千軒町遺跡では当該資料の名称を「銭塊」と呼称しているため、本報告でも草戸千軒町遺跡のそれに準じることにした¹⁴⁾。さらに、当該資料については、銭束や各銭が錆によって癒着して分離不可能である可能性が高いことや現状での「銭塊」の状態こそが、個別の銅銭1枚1枚の状況よりも、文化財としての価値が高いと判断した。従って、銭塊を構成する銅銭1枚1枚を解体して個別の緋銭を判読する作業は実施せず、銭塊の状態のまま保存処理を進めることとした。ただ、銭塊の側面から個別の銅

銭塊の状態
で保存処理

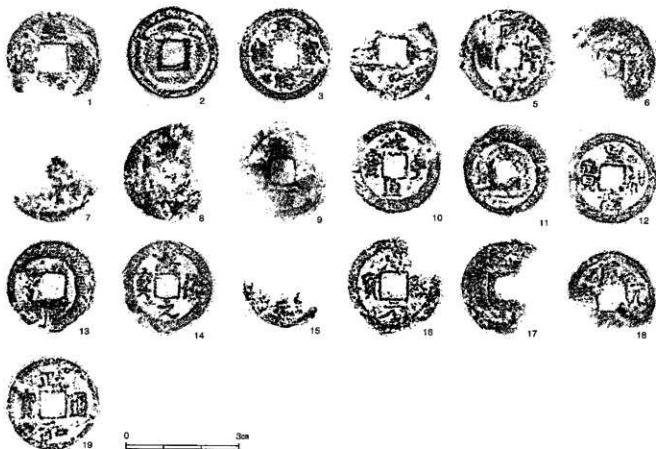
注4) 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編「一括出土銭について」(『草戸千軒町遺跡発掘調査報告書Ⅱ～北部地域南中部の調査～』(1999年)古田寛「旧万寿寺跡第7次調査で発見された銅銭一括出土遺構」(『出土銀貨』第34号 2014年)



第4-122図 07-SX100出土遺物実測図⑥(銭塊1のB面、1/1)

図面	No.	銭貨名	王朝	初鋳年	書体
第4-121図 (銭塊1)	A面1	治平通寶	北宋	1064	真書
	A面2	元豊通寶	北宋	1078	行書
	A面3	(背面)			
	A面4	皇宋通寶	北宋	1038	
	A面5	景祐元寶	北宋	1034	真書
	A面6	(背面)			
	A面7	(背面)			
	A面8	熙寧元寶	北宋	1068	真書
	A面9	元豊通寶	北宋	1078	行書
	A面10	熙寧元寶	北宋	1068	真書
	A面11	(背面)			
	A面12	景德元寶	北宋	1004	
	A面13	祥符元寶	北宋	1008	
	A面14	祥符元寶	北宋	1008	
	A面15	元祐通寶	北宋	1086	篆書
	A面16	(背面)			
	A面17	(背面)			
	A面18	皇宋通寶	北宋	1038	真書
	A面19	天聖元寶	北宋	1023	篆書
	A面20	元豊通寶	北宋	1078	行書
	A面21	(背面)			
	A面22	元祐通寶	北宋	1086	篆書
	A面23	開元通寶	唐	621	

図面	No.	銭貨名	王朝	初鋳年	書体
第4-122図 (銭塊1)	B面1	元符通寶	北宋	1098	真書
	B面2	元豊通寶	北宋	1078	行書
	B面3	(背面)			
	B面4	(背面)			
	B面5	皇宋通寶	北宋	1038	真書
	B面6	(背面)			
	B面7	(背面)			
	B面8	天聖元寶	北宋	1023	真書
	B面9	(背面)			
	B面10	元豊通寶	北宋	1078	篆書
	B面11	明道元寶	北宋	1032	真書
	B面12	祥符元寶	北宋	1008	
	B面13	皇宋通寶	北宋	1038	真書
	B面14	開元通寶	唐	621	
	B面15	熙寧元寶	北宋	1068	真書
	B面16	(背面)			
	B面17	元豊通寶	北宋	1078	篆書
	B面18	祥符元寶	北宋	1008	
	B面19	皇宋通寶	北宋	1038	真書
	B面20	元豊通寶	北宋	1078	行書
	B面21	(背面)			
	B面22	天聖元寶	北宋	1023	篆書
	B面23	(背面)			
	B面24	(背面)			



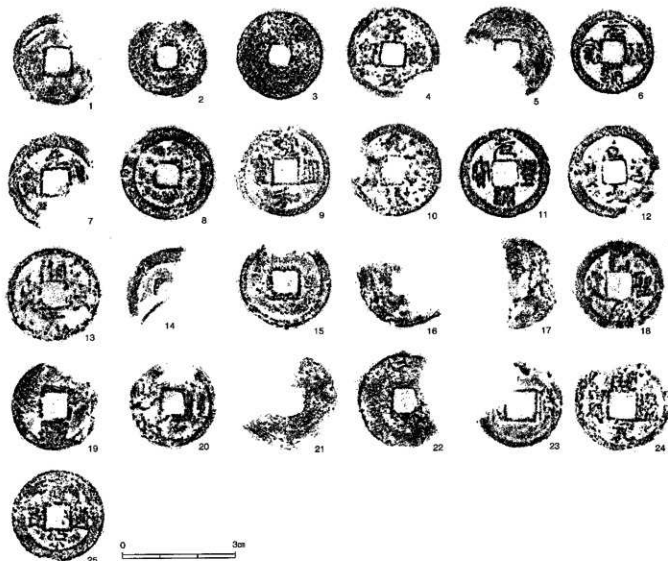
第4-123図 07-SX100出土遺物実測図⑦(錢塊2のA面、1/1)

銭の銭種を一定量確認できるため、現状で銭種を判別できる銅銭については、個々の拓影図を作成し、図面として提示を行った。

銭塊 1 銭塊 1 (第4-117・118・121・122図) は長さ32.4cm、幅16.0cm、高さ14.0cmを測り、その重さは18.2kgである。当該資料は約100枚単位で一摺りとされた銭束の単位が、右側(A面)で23単位以上、左側(B面)で24単位以上が確認できる。銭塊を解体していないため、最終的な銅銭の枚数は不明であるものの、その総数は約5,000枚と判断できる。側面を確認できる銭種は、A面(第4-121図)で23単位のうち16枚、B面(第4-122図)で24単位のうち15枚である。最古銭は初鑄造年621年の唐銭「開元通寶」、最新銭は初鑄造年1098年の北宋銭「元符通寶」である(第3表参照)。

銭塊 2 銭塊 2 (第4-117・118・121・122図) は長さ31.0cm、幅18.4cm、高さ14.0cmを測り、その重さは18.1kgである。当該資料は約100枚単位で一摺りとされた銭束の単位が、右側(A面)で19単位以上、左側(B面)で25単位以上が確認できる。銭塊を解体していないため、この資料についても最終的な銅銭の枚数は不明であるものの、その総数は約5,000枚と判断できる。側面を確認できる銭種については、A面(第4-123図)で19単位のうち10枚、B面(第4-124図)で25単位のうち11枚である。最古銭は初鑄造年14年となる王莽新代の「貨泉」、最新銭は初鑄造年1265年の南宋銭「咸淳元寶」である(第4表参照)。なお、「貨泉」は中国新代天鳳元年から建武16年(14~40)の間に鑄造された青銅製の貨幣で、表面に孔を挟んで「貨」「泉」の文字を配する。南宋銭・北宋銭と比較すると、中央の方孔が大型であることや方孔の周囲に方格を有することが特徴的で、日本

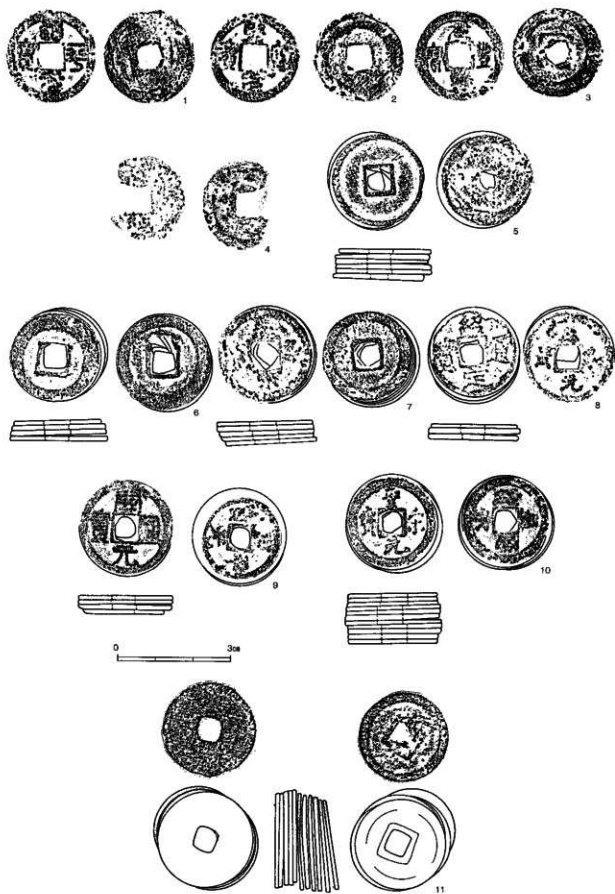
貨幣



第4-124図 07-SX100出土遺物実測図③(銭塊2のB面、1/1)

図版	No.	銭貨名	王朝	初鋳年	書体	
第4-123図 (銭塊2)	A面1	天聖元寶	北宋		篆書	
	A面2	(背面)				
*No.は第120図 にも対応	A面3	嘉祐通寶	北宋	1056	真書	
	A面4	(背面)				
	A面5	咸平元寶	北宋	998		
	A面6	(背面)				
	A面7	(背面)				
	A面8	(背面)				
	A面9	天聖元寶	北宋	1023	篆書	
	A面10	元豐通寶	北宋	1078	行書	
	A面11	(背面)				
	A面12	至和元寶	北宋	1054	篆書	
	A面13	(背面)				
	A面14	淳化元寶	北宋	990	草書	
	A面15	(背面)			真書	
	A面16	淳化元寶	南宋	1174		
	A面17	(背面)				
	A面18	咸淳元寶	南宋	1265		
	A面19	政和通寶	北宋	1111	真書	
	第4-124図 (銭塊2)	B面1	(背面)			
		B面2	(背面)			
B面3		(背面)				

図版	No.	銭貨名	王朝	初鋳年	書体	
第4-124図 (銭塊2)	B面4	景徳元寶	北宋	1004		
	B面5	(背面)				
	*No.は第120図 にも対応	B面6	元祐通寶	北宋	1086	篆書
		B面7	元豊通寶	北宋	1078	行書
		B面8	(背面)			
		B面9	宣和通寶	北宋	1119	真書
		B面10	元祐通寶	北宋	1086	行書
		B面11	元豊通寶	北宋	1078	篆書
		B面12	至道元寶	北宋	995	草書
		B面13	開元通寶	唐	621	
		B面14	(背面)			
		B面15	(背面)			
		B面16	(背面)			
		B面17	(背面)			
		B面18	紹聖元寶	北宋	1094	行書
		B面19	(背面)			
		B面20	(背面)			
		B面21	(背面)			
		B面22	(背面)			
		B面23	寶泉	魏	14	
		B面24	開元通寶	唐	621	
	B面25	皇宋通寶	北宋	1038	真書	



第4-125図 07-SX100出土遺物実測図⑦ (1/1)

の弥生時代研究において、実年代を想定する重要資料とされていることは周知の通りである。07-SX100は14世紀代の遺構と推定しているため、貨泉は約1,300年間前後に渡って継続して使用されていたことになる。

なお、第4-125図は07-SX100の上位や周辺から出土した銅銭である。前述したように、これらが銭塊1と銭塊2を構成していた銅銭の一部であったかどうかについては判断が難しいが、銭種が確認できる資料については、銭塊1・銭塊2の資料と矛盾するものではない。

以上、銭塊1と銭塊2はそれぞれ約5,000枚の銅銭で構成されており、銭塊1と銭塊2の銅銭は総計で約1万枚と推定される。銅銭約5,000枚は5貫文であるから、07-SX100からは10貫文の銅銭が出土したことになる。

07-SX121 (第4-124図)

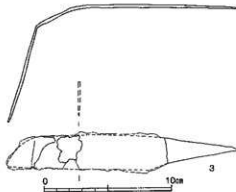
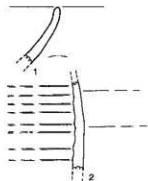
N65～O65区に位置する遺物集中部である。東西約1m、南北約1.8mの範囲に土器類や鉄器が集中して分布していたが、遺構のプランを明瞭に検出することができなかった。遺物が含まれている範囲は周辺の土壌と比較すると、やや暗い褐色を呈していた。出土遺物には瓦や土器類、鉄器などが認められたが、腐化に値するような遺物は少ない。遺構の性格は不明であり、詳しい年代を特定できなかったが、14～15世紀代のものと推定している。

07-SX121出土遺物 (第4-125図)

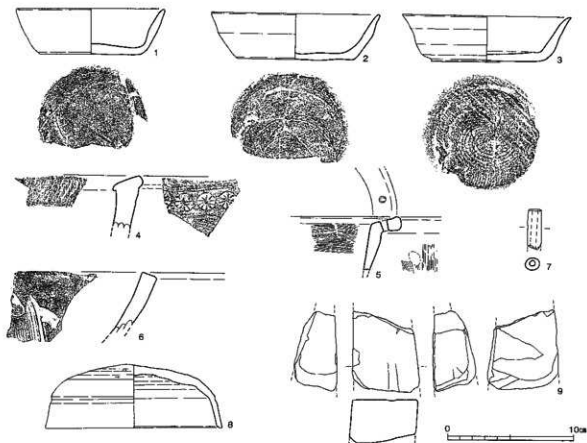
1は瀬戸美濃産天目煎の口縁部で、16世紀代に比定される資料であろう。2は中国産白磁で、水注または瓶の胴部である。3は鉄器で、保存処理を行っていないため、現状では詳しい器種が不明である。柄と刃部が残存しており、上面観がL字形を呈することから、意図的に曲げられていることがわかる。



第4-126図
07-SX121実測図 (1/30)



第4-127図 07-SX121出土遺物実測図 (1/3)



第4-128図 07-SX095出土遺物実測図(1/3)

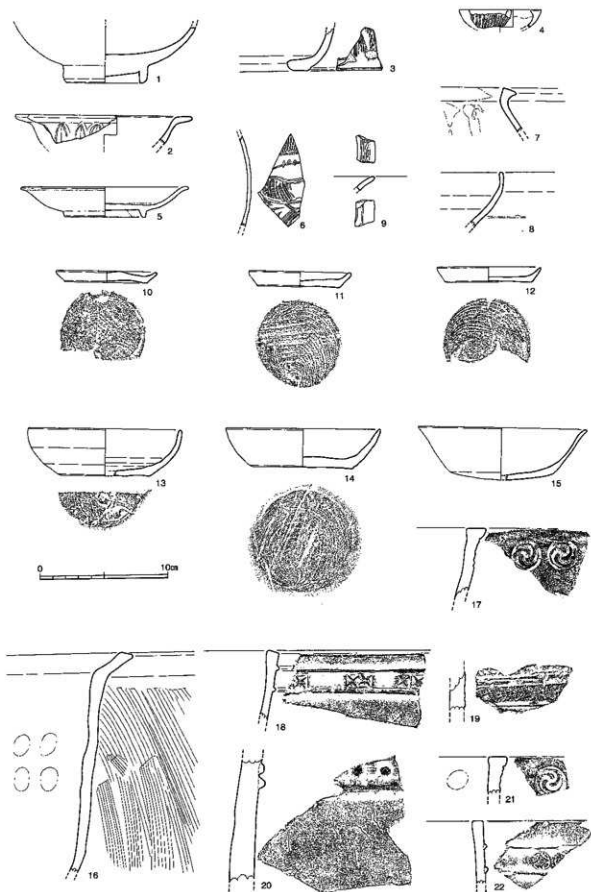
6 包含層・整地層の遺物

07-SX095

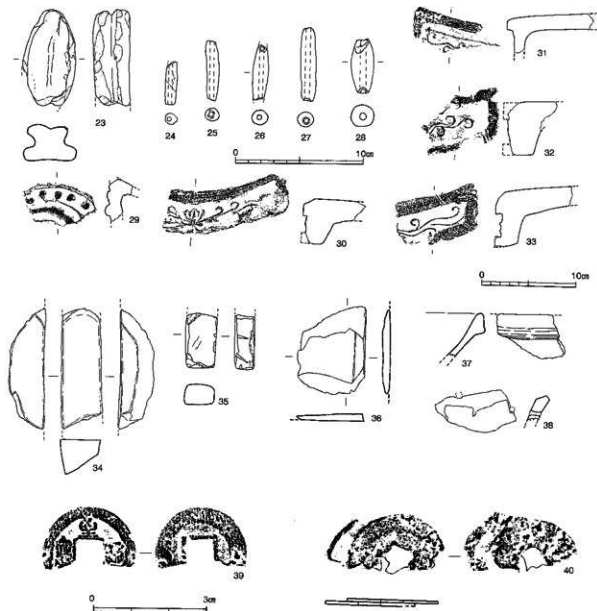
O65～P65区にかけて広がる整地層で、その上面は14世紀代以降の遺構面を形成する。整地層が存在する地点を10mメッシュを基本にして掘り下げ、遺物を回収した。古墳時代から15世紀前半までの遺物が出土している。

07-SX095出土遺物(第4-136図)

1～3は土師質土器坏で、口縁端部がやや外反することから、14世紀末から15世紀前半に比定される資料である。底部外面には糸切り痕と板状圧痕が認められる。4は瓦質土器の口縁部で、口縁部上面に傾斜した平坦面をもち、外面にはやや崩れた菊文が刻印されている。15世紀代に比定される。5は瓦質土器の土鍋で、胴部に外面に縦方向、内面に横方向の刷毛目調整がなされている。口縁部には貫通孔が認められる。14～15世紀代に比定される。6は備前焼播鉢の口縁部で、中世3期a(14世紀後半)に比定される製品である。7は管状土鉢の破片で、一端が欠損する。8は須恵器坏蓋で、天井部に回転ヘラ削りを施し、口縁部と天井部の境に沈線をめぐらす。古墳時代後期遺物で、田辺昭一編年のMT15段階(6世紀前半)に比定される資料である。9は砂岩を素材とする砥石である。



第4-129図 包含層・整地層出土遺物実測図① (1/3)



第4-130図 包含層・整地層出土遺物実測図② (1/3, 1/1)

その他の遺物 (第4-127図・第4-128図)

1～3は中国龍泉窯系青磁で、1は15世紀代の碗、2は13世紀代の鉢、3は器種不明の特殊品である。3は外面に線刻による蓮弁文が認められ、底部に孔を設ける。4・5は中国産の白磁で、4は14世紀代の合子身、5は見込みが露胎となる16世紀代の皿である。6は青白磁梅瓶の胴部破片で、12～13世紀代の製品である。7・8は中国産の黒釉陶器で、7は壺、8は鉢である。いずれも16世紀代の製品。9は朝鮮王朝産の象嵌陶器碗で、15世紀代に比定される。10～12は土師質土器の小皿、13・14は土師質土器の坏で、いずれも14世紀代に位置づけられる。15・16は8～9世紀代に比定される土師器で、15は坏、16は甕である。17～22は瓦質土器火鉢の口縁部である。

23は有溝土鉢、24～28は管状土鉢、29は軒丸瓦、30～33は軒平瓦である。34～36は砥石で、いずれも砂岩を素材とする。37・38は滑石製の石鍋の破片。38には補修のためと思われる貫通孔が2箇所認められる。39・40は銅銭で、40は2枚が接着している。

蔣山万寿寺跡

旧万寿寺跡第6～10次調査
(第1分冊)

都市計画道路庄の原佐野線(元町工区)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

大分県立埋蔵文化財センター調査報告書 第6集

平成31年3月31日

編集・発行 大分県立埋蔵文化財センター
〒870-0152
大分県大分市牧緑町1-61
TEL 097-552-0077

印刷 いづみ印刷株式会社
〒870-1117
大分県大分市高江西1丁目4323番地の25
TEL 097-535-8655
